

城 遺 跡  
下 山 田 遺 跡  
ヶ ジ Ⅲ 遺 跡

1986年 3 月

鹿児島県大島郡笠利町教育委員会



## 序 文

城遺跡、下山田遺跡、ケジⅢ遺跡の発掘調査が砂採取工事、開発に先だって行われたことは今後の文化財行政においてまことに意義のあることだと思います。それだけ文化庁と県文化課には大変お世話になりました。

本町では奄美でも先史遺跡が最も多く、また発掘調査も年次的に行われていますが、まだまだ古代社会を解明するには至っておりません。今後は遺跡の保護と住民の文化財愛護思想を高めるためにも努力していきたいと思います。

本遺跡の出土品は整理作業が終了してから町立歴史民俗資料館にて大切に保管、展示していきます。

本遺跡の発掘調査は地主からの届出によって発見され、三遺跡とも地主、業者の理解が得られ、調査がスムーズに進行したことに感謝いたします。県文化課の調査員の先生方、そして地元の作業員の方々には夏の厳しい暑さの中本当にごくろうさまでした。ここに厚くお礼申し上げます。

本報告書が今後奄美先史時代解明のため多くの方々に愛読され、学術研究資料として活用されることを念願いたします。

昭和61年3月

笠利町教育委員会

教育長 大野 清延

## 例 言

1. この報告書は、個人による土壌改良工事に伴って発見された城遺跡<sup>キヤク</sup>の発掘調査および個人の土砂採取により滅失する周知の遺跡<sup>シキヤク</sup>—下山田遺跡・ケジⅢ遺跡—の発掘調査の報告書である。
2. この発掘調査は、当初、城遺跡のみを対象としていたが、城遺跡の調査中に、下山田遺跡およびケジⅢ遺跡において個人の土砂採取が行われていることが判明し、急拠、国および県に諮って両遺跡の調査を追加して行うこととしたものである。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 挿図および表の番号は通しとしたが、出土遺物はそれぞれの遺跡ごとの通し番号とし、挿図番号、図版番号は一致する。
5. 本書の執筆は次のとおりである。

第1章—第1節、第3節（2）、第2章、第4章—第1節、第3節、第4節、第5節、第5章、第6章	中山
第1章—第2節、第3節（1）、（3）、第3節、第4章—第2節、第4節、第5節、第6章	繁昌
第3章—第6節、第7節	新東
6. 本書を作成するにあたり、次の特別寄稿をいただいた。

論文1 城遺跡出土の人骨について	鹿児島大学歯学部 小片丘彦、川路則友ほか
論文2 下山田遺跡出土の貝について	食生活研究家 久留ヒロミ
7. 出土遺物は、本報告書刊行後、笠利町教育委員会が管理し、笠利町立歴史民俗資料館に保管、展示する。
8. 城遺跡出土の“斜格子沈線文土器”は型式名ではなく、“斜格子の沈線が施された土器”の意である。

参考1



城遺跡

参考2



下山田遺跡

## 本文目次

序文	○	1号人骨	18	
例言	2	第6節 中世	20	
本文目次	3	○	2号人骨	28
挿図目次	4	第7節 近世	29	
表目次	4	○	3号人骨	29
図版目次	5	第8節 小結	32	
第1章 調査の経過	6	第4章 下山田遺跡	35	
第1節 調査に至るまでの経過	6	第1節 位置	35	
第2節 調査の組織	6	第2節 層序	37	
第3節 調査の経過(日誌抄)	7	第3節 概要	37	
第2章 位置と環境	9	第4節 縄文時代	39	
第1節 位置	9	第5節 小結	47	
第2節 環境(周辺遺跡)	9	第5章 ケジⅢ遺跡	49	
第3章 城遺跡	11	第1節 位置	49	
第1節 位置	11	第2節 層序	50	
第2節 層序	13	第3節 出土遺物	52	
第3節 概要	13	第4節 小結	55	
第4節 縄文時代	14	第6章 まとめ	56	
第5節 弥生-古墳時代	17	あとがき	92	

鹿児島県奄美大島城遺跡出土の<sup>ガラス</sup>人骨

鹿児島大学歯学部

小片丘彦・川路則友・佐熊正史

峰 和治・山本美代子・岡元満子 …… 83

下山田遺跡出土の貝について …… 食生活研究家 久留ヒロミ …… 48

参考3



ケジⅢ遺跡

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡 …………… 10	第21図 彌羽口 …………… 27
第2図 城遺跡地形図 …………… 11	第22図 2号人骨出土状況 …………… 28
第3図 城遺跡土層断面図 …………… 12	第23図 近世墓1号 …………… 29
第4図 城遺跡グリッド配置図 …… 13	第24図 近世墓2号(3号人骨) …… 30
第5図 面縄西洞式土器 …………… 14	第25図 磁器・瓦器・陶器・刀子 …… 31
第6図 縄文時代相当の土器 …… 15	第26図 下山田遺跡地形図 …………… 35
第7図 斜格子沈線文土器 …………… 16	第27図 下山田遺跡土層断面図 …… 36
第8図 石・貝製品 …………… 16	第28図 下山田遺跡遺構配置図 …… 38
第9図 宇宿上層式土器 …………… 17	第29図 集石遺構 …………… 39
第10図 兼久式土器ほか …………… 18	第30図 I類土器 …………… 40
第11図 1号人骨出土状況 …………… 18	第31図 II・III類土器 …………… 41
第12図 城遺跡遺構配置図 …………… 19	第32図 IV・V類土器 …………… 42
第13図 ビット3検出状況 …………… 20	第33図 曾畑系土器・その他の土器 …… 45
第14図 ビット内出土遺物 …………… 20	第34図 石器 …………… 46
第15図 土埴内出土遺物 …………… 22	第35図 ケジ遺跡地形図 …………… 49
第16図 類須恵器(1) …………… 23	第36図 ケジIII遺跡土層断面図 …… 50
第17図 類須恵器(2) …………… 24	第37図 遺構図 …………… 51
第18図 青磁 …………… 25	第38図 土器 …………… 53
第19図 白磁・染付 …………… 26	第39図 石器 …………… 54
第20図 滑石製品・滑石混入土器 …… 27	

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡 …………… 9	第4表 近世墓2号出土人骨 …… 30
第2表 ビット …………… 21	第5表 遺物(1) …………… 33
第3表 土埴 …………… 21	第6表 遺物(2) …………… 34

## 図 版 目 次

<p>図版1 遺跡遠景(航空写真) ..... 59 城遺跡近景 ..... 59</p> <p>図版2 城遺跡土層断面 ..... 60 調査風景 ..... 60</p> <p>図版3 中世の遺構 ..... 61 ピット3検出状況 ..... 61</p> <p>図版4 1号人骨検出状況 ..... 62 2号人骨検出状況 ..... 62</p> <p>図版5 3号人骨検出状況 ..... 63 遺物出土状況 ..... 63</p> <p>図版6 土器出土状況(宇宿上層式)··· 64 土器出土状況(面縄西洞式)··· 64</p> <p>図版7 土器出土状況(斜格子沈線文)··· 65 貝溜り検出状況 ..... 65</p> <p>図版8 面縄西洞式 ..... 66 縄文時代相当の土器 ..... 66</p> <p>図版9 斜格子沈線文 ..... 67 宇宿上層式 ..... 67</p> <p>図版10 貝輪・螺蓋製貝弁 ..... 68 兼久式 ..... 68</p> <p>図版11 ピット3出土遺物 ..... 69 類須恵器(完形) ..... 69</p> <p>図版12 青磁 ..... 70 白磁・染付 ..... 70</p> <p>参考1 城遺跡航空写真 ..... 2 参考2 下山田遺跡航空写真 ..... 2 参考3 ケジⅢ遺跡航空写真 ..... 3</p>	<p>図版13 鞆羽口・鉄滓 ..... 71 近世陶器・刀子 ..... 71</p> <p>図版14 下山田遺跡近景 ..... 72 下山田遺跡土層断面 ..... 72</p> <p>図版15 集石検出状況 ..... 73 貝溜り検出状況 ..... 73</p> <p>図版16 遺物出土状況 ..... 74 土器出土状況 ..... 74</p> <p>図版17 土器出土状況 ..... 75 石器出土状況 ..... 75</p> <p>図版18 土器 ..... 76 土器 ..... 76</p> <p>図版19 土器 ..... 77 土器 ..... 77</p> <p>図版20 石器 ..... 78 石器 ..... 78</p> <p>図版21 ケジⅢ遺跡近景 ..... 79 ケジⅢ遺跡土層断面 ..... 79</p> <p>図版22 遺構検出状況 ..... 80 遺物出土状況 ..... 80</p> <p>図版23 遺物出土状況 ..... 81 遺物 ..... 81</p> <p>図版24 遺物 ..... 82 遺物 ..... 82</p> <p>参考4 土城1検出状況(1) ..... 29 参考5 土城1検出状況(2) ..... 29 参考6 小片教授による1号人骨検出··· 30 参考7 平板実測作業 ..... 30</p>
---	--

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

<sup>グスク</sup>城遺跡は、昭和59年に地主の白内慶治氏がユンボによる土の入れ替え（土壌改良）を行っている時に、土器片と人骨が出土したことにより発見された。白内氏は遺物を町立歴史民俗資料館に届けるとともに、町教育委員会に遺跡発見の通報をした。町教委は白内氏に現状の保存を依頼する一方、県教育委員会文化課に連絡を行った。また、町文化財保護審議会に諮った結果、この遺跡がグスクと呼ばれる点、人骨が発見されている点など、学術的にも非常に貴重な遺跡であると判断されたため、町教委が国・県の補助を得て発掘調査を行うこととした。

<sup>トヤマ</sup>下山田遺跡は、昭和40年代に地元の人によって発見され、当時砂取りが行われていたが、町教委には届け出はなされていなかった。しかし、昭和53年に町教委が露頭を観察したところ、遺跡は砂丘全体に広がることが判明したので、昭和59年県道の拡幅に先立って町教委が発掘調査を行った。その結果、道路が砂丘を分断する形となり、独立した格好の砂丘では使い途がないとして地主は道路面まで砂丘を下げたいとの申し入れが町になされ、町教委は城遺跡と合わせて緊急に調査することになった。なお、本遺跡は当初、万屋下山田遺跡と呼称していたが、万屋は大字名であるところからこれを除き、下山田遺跡と呼ぶことにした。

ケジ遺跡は、昭和59年度に県文化課が奄美新空港建設に伴う事前調査として発掘調査（ケジⅡ遺跡）を行った。ケジⅢ遺跡は、独立した砂丘上にあり、昭和60年度の空港建設により大半を失うことになったため、残余の部分について地主の地下げの意向が表明され、下山田遺跡と同様に緊急に調査することになったものである。なお、ケジ遺跡は、ケジⅠ・ケジⅡ・ケジⅢの3遺跡の総称である。

### 第2節 調査の組織

調査主体者	笠利町教育委員会	
調査責任者	笠利町教育委員会教育長	大野清延
	笠利町教育委員会社会教育課長	前田篤夫
	笠利町教育委員会派遣社会教育主事	原田 繁
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課文化財研究員	繁昌正幸
	鹿児島県教育委員会文化課主査	新東兎一
	笠利町教育委員会主事（笠利町歴史館）	中山清美

なお、調査企画において、県教育委員会文化課長 桑原一廣、同課長補佐 坂口肇、同主幹 中村文夫、同主任文化財研究員 向山勝貞の各氏のほか、同課管理係の指導・助言を得た。また、鹿児島県考古学会長 河口貞徳氏及び鹿児島大学歯学部教授 小片丘彦氏、同助手 川路則友氏には、遺構・遺物・人骨等について指導・助言を得た。久留ヒロミ氏には、食生活研究の面から指導を受け、原稿をいただいた。



### 第3節 調査の経過（日誌抄）

#### (1) 城遺跡

- 昭和60年6月24日～29日 24日、午前中用具運搬等諸準備、午後から調査開始。4mグリッド設定、表土剥ぎ取り開始。グリッドの名称を決定し、重機（ユンボ）を利用して表土剥ぎ取り及び崩土の移動。既掘部分の流入・崩壊土の取り上げ。C・D-2・3区、Ⅱ層掘り下げ。堅固で、木炭を多く含み、貝類も多く出土する。青磁・陶器等出土。ピット検出。D・E-4区、下の段の旧畑との境を出し、Ⅱ層以下が残存するか確認。26・27日、教育長、24～27日、社教課長、24～26日、中場町文化財審議会委員長、26～28日、県文化課戸崎研究員、26日、住用村森田主事来跡。29日、台風6号接近のため作業は午前中とし、台風対策を施す。
- 7月1日～5日 今週から県文化課新東主査が調査に加わり、中山清美はケジⅢ遺跡へ。Ⅱ層面検出及び遺構検出。炉跡1基のほかピットを大小10基以上検出。D-5区、深掘り。遺物なし。断面実測。1号人骨埋土状況検出及び実測。C・D-3区、清掃・写真・平板実測。C・D-4区に土城基検出、人骨片若干残存。F・G-3区は岩盤の風化土が見られ、包含層も残存しない。C-3区は西に傾斜している状況が確認された。1日、KTS・南日本新聞、南海日日新聞など記者取材。社教課長来跡、2・3日、町歴史民俗資料館山田館長来跡。3日、中場先生来跡。
- 7月8日～13日 Ⅲ層面及びピット検出。D-2区、人骨検出（2号人骨）。9～10日、鹿児島大学歯学部小片教授・川路助手に人骨の実測及び取り上げの指導を受ける。河口先生、県文化課坂口補佐来跡。C-4区、人骨（3号）検出、平板実測・取り上げ・F-4区、Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。宇宿上層式があるとの由。これにより、G-4・5区、F-5区の調査が必要となり、表土剥ぎ取りにかかる。堅固なため、主としてユンボによる。C・D-2・3区に宇宿上層式土器散在。D-3区に割合多く、C-3区には見られない。E-3区、Ⅳ層以下掘り下げ、遺物検出。全区、清掃及び土城・ピット等の写真撮影。C・D-2・3区は南西側に傾斜している。貝が2ヶ所に小さく散布している。F・G-3区、Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。G-3区Ⅲ層下部にサンゴ片が3枚重なって検出されたが、性格不明。F・G-4区、Ⅲ層掘り下げ。小貝留りが見られ、東側に礫が並ぶが、焼土・灰等は見られない。全体として黄色砂層からは遺物は出土しないことが確認された。8日、大島北高教諭約10名来跡。中場先生来跡。9日、大島・南海日日・南日本・西日本の各新聞記者取材。10日、6月分貸金支払い。11日、社教課長・係長来跡。新東主査は13日までである。
- 7月15日～17日 全区、遺物検出、清掃、写真撮影、平板実測。断面清掃、写真、実測図。断面実測の後、帯外し、遺物検出。下層の深掘り、清掃、写真、断面実測。貝、土器等、骨（魚及び獣）の選別を行い、他遺跡の遺物との混同を回避する。仮に町歴史民俗資料館に移す。2日間は中山が下山田遺跡、繁昌が城遺跡を担当し、17日午後から両調査員は下山田遺跡で合流した。17日午前をもって城遺跡の発掘調査は全て終了した。発掘用具・テント等を下山田遺跡に運搬し、17日午後から同遺跡の調査に加わった。

## (2) ケジⅢ遺跡

昭和60年7月1日～日

城遺跡からケジ遺跡へ中山が入る。表土は雑木、ソテツの伐採等で攪乱されており、さらに木の根やソテツの根が深く遺物包含層まで攪乱を受けている部分もあった。

調査はひとつの遺物を県事業と町事業に分けて行うことになる。道路拡張に伴う部分は県が行い、残された部分は遺跡の保存からしても周囲がすでに工事を行っており、地主も独立した砂丘の現状では土地の利用法がないとして道路面まで砂丘を下げる意志を強くした。結果的には道路拡張でケジⅢ遺跡は記録保存という形になる。しかも県で行う部分と町で行う部分に分けての調査となり、何か割り切れなさを感じる。調査方法は県、町の担当分を含めグリッド法で行う。そしてグリッドで調査区分し、遺跡全体の性格を把握することにした。

遺物包含層は遺跡全体には広がっておらず、ケジⅠ、Ⅱから南北に地形の落ち込みが見られその箇所が多いのが特徴である。表層は雑木、ソテツ等の取り除くためすでになく、その攪乱層からは滑石製の石ナベ片も出土している。遺物包含層まで達するピットが方形に検出されたが、これは滑石等に伴うピットと思われる。

遺物包含層からはほとんど曾畑系の土器の出土であり、また貝類の出土もきわめて少なかった。

## (3) 下山田遺跡

昭和60年7月15日～20日 15日、ケジⅢ遺跡より発掘用具、テント等搬入。表土削ぎ取り開始。

15～17日午前中は、担当は中山のみ。17日午後からは繁昌が加わる。グリッド設定。A～D-1・2区は相当攪乱を受けている。遺物はⅣ層に見られ、一部Ⅱ層下部にもある。遺跡の範囲をつかむため、表土の直下がⅣ層となると追いつき、どうにか確認ができた。A-1区南側からD-4区南側にかけてⅡ層が残るが、これは旧地形が小溝状を呈していたためと思われる。C-3区に石斧2点出土。B-1区に水晶出土。B-2区に集石あり。18日、町教育長、18・19日、社教課長、17・18日、中場先生来跡。17日、大島新聞記者取材。19・20日、九州歴史資料館亀井先生来跡、城遺跡ほか町内出土の青・白磁等を見てもらう。

7月22日～27日 B・C-1・2区、D-2区、Ⅱ層掘り下げ、C-2区に割合土器が多く、Ⅱ層下部で捉える。B-2区の集石の他に、D-2区に貝溜り、C-1区にも小規模の貝溜りがⅢ層に検出された。Ⅲ層には礫片も多い。B-2区集石の実測。貝溜りの貝の取り上げを久留先生に依頼する。B-2区の集石下に、面縄前庭式土器を伴う貝溜りが見られ、別な時期のものとして捉える。下層の遺物包含層の有無確認のため、深掘り開始。平板実測及び断面実測。22日・23日、徳之島高校成尾教諭来跡。21日～27日、久留ヒロミ先生(食生活研究家)来跡。貝の取り上げを依頼。24日、名瀬市資料館準備室職員来跡。跡見女子大講師及び学生2名来跡。25～26日、熊本大学白木原教授来跡。同日、財部小鶴田教諭来跡。26日、沖縄県立博物館知念氏来跡。中場先生来跡。27日、下野先生、大島教育事務局、県文化課向山・立園両主任、町社教課長来跡。7月分賃金支払い。本日をもって下山田遺跡調査は全て終了。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置

奄美大島は九州の南部から台湾にかけ弧状に連なる南島のほぼ中央に位置している。(南島とここで使うのはトカラから先島までの島々を示すことにする。)奄美大島全体でグスク時代の遺跡まで含めると現在100近くは知られている。しかしその現状は決して良好な保存状態とはいえない。与論島は主としてグスク時代の遺跡が多い。沖永良部島はグスク時代の遺跡、砂丘遺跡、台地状遺跡に大別出来る。徳之島はグスク時代の遺跡、砂丘遺跡、小山岳遺跡に大別出来る。大島本島はグスク時代の遺跡、砂丘遺跡、台地状遺跡に大別出来る。大島本島の中でも特に砂丘遺跡がもっとも多いのが笠利町東海岸である。笠利半島の東海岸一帯は太平洋岸に面し、起伏のおだやかな台地状地形が形成されている。大島本島で最北端に位置する笠利半島は海流も太平洋側を通る東側と東シナ海側を通る西側の海流がこの北端で合流し、魚貝類も豊富である。

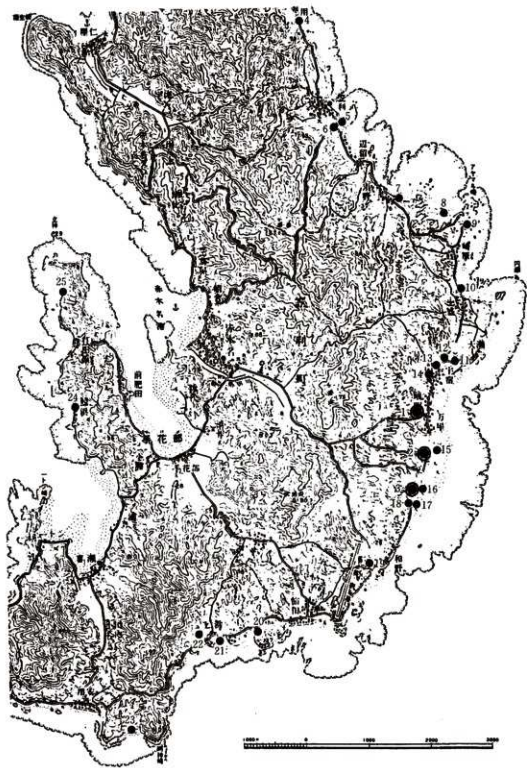
### 第2節 環境

奄美大島の中でも特に遺跡が集中している笠利半島で考古学的調査も他地域にくらべかなり行われている。笠利町における遺跡の数は下表のとおりであるが、現在さらにくわしい分布調査を行っている。笠利半島東海岸には宇宿貝塚をはじめ宇宿高又遺跡、宇宿遺跡、ケジ遺跡、ヤーヤ洞穴遺跡、長浜金久Ⅰ遺跡、コビロ遺跡、辺留窪遺跡、あやまる第2貝塚などの発掘調査がすでに行われている。その結果ヤーヤ洞穴遺跡からは爪形文土器、宇宿貝塚から方形の石組住居跡、弥生人骨、長浜金久Ⅱ遺跡からゴホウラ貝製の貝輪をはじめ地獄針、オオツタノハ製の貝輪など多数が出土している。これらの遺跡のほとんどが小規模なものであり、その砂丘上にいくつもの集団生活が行われたことがうかがえる。

砂丘は現在の海岸線を形成する新砂丘と、僅かに内陸よりある積衝台地の直下若しくはその縁辺部に形成された古砂丘とに大別できる。ただし古砂丘と新砂丘の間にある砂丘は適当な呼び名がないので仮に中間砂丘とする。砂丘上に形成される遺跡のほとんどが古期砂丘と中間砂丘に立地している。古期砂丘が主に縄文時代、中間砂丘が主に縄文から古墳時代であるのが特徴である。

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	城山田ケジ(Ⅱ)	笠利町万屋字城山田ケジ(Ⅱ)	9	あやまる第1貝塚	笠利町須野字崎原	17	長浜金久第1貝塚	笠利町和野字長浜
2	下田ケジ(Ⅱ)	万屋字下山田	10	土 塚	土 塚	18	長浜金久第2貝塚	和野字長浜
3	ケジ(Ⅱ)	万屋字ケジ	11	宇宿 港	宇宿字港	19	ナピロ川	和野字ナピロ川
4	用 留 窪	用 留 窪	12	宇宿貝塚	宇宿字大連	20	立 神	徳田立神
5	辺 留 窪	笠利字辺留窪	13	宇宿高又	宇宿字高又	21	土 塚	土 塚
6	辺 留 窪	笠利字辺留窪	14	宇宿小学校	宇宿	22	ヤーヤ洞穴	土 塚
7	コビロ	須野字コビロ	15	万 屋 泉	万 屋	23	明 神 崎	用安大牧
8	あやまる第2貝塚	須野字崎原	16	万 屋 泉	万 屋 泉	24	鯨 浜	鯨 浜
						25	サウチ	喜瀬字サウチ

第1表 周辺遺跡



第1圖 周辺遺跡

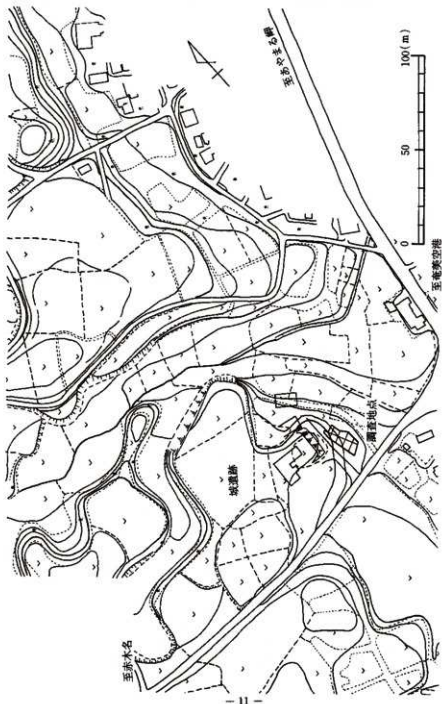
グスク  
城 遺 跡



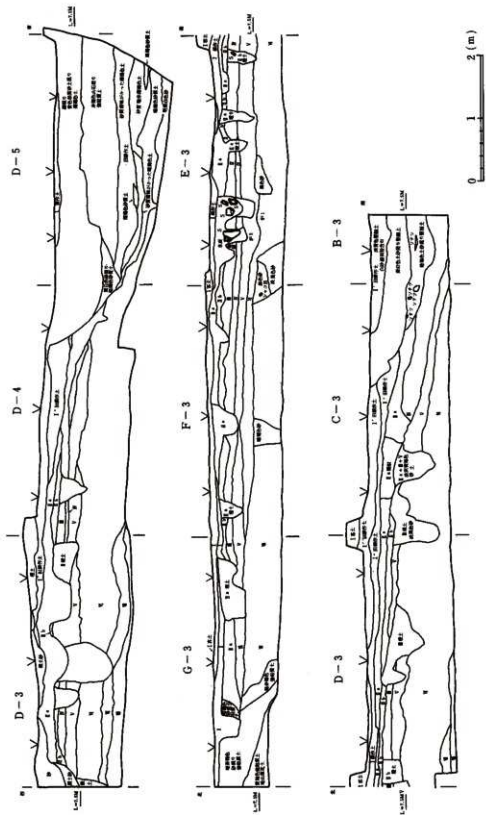
### 第3章 城 遺 跡

#### 第1節 位 置

城遺跡の所在する笠利町は、薩南諸島に所属する大島本島北端の町で、本遺跡は東海岸沿いのほぼ中央、万屋集落の中にある。町役場のある赤木名から東行する県道佐仁万屋赤木名線と、奄美空港から北行する県道万屋赤尾木線との分岐点の西方約100mほどのところに位置する。



第2図 城遺跡地形図



第3圖 城邊跡土層断面図



当地は西方に聳える淀山(175m)から東に穏やかに下りた台地の縁辺部に当り、標高約10~12mの小丘地形を呈している。遺跡は11m程のソテツの小山を中心として、北及び西側に広く、南・東に狭い地形で、南東には小さな谷が入り込んでいる。今回人骨が出土した地点と小山の間は若干削平されて、新築2階建ての民家が建てられている。人骨の出土により調査を行った今回の範囲は、その民家とは比高差約2m程下りた畑地であって、サトウキビなどが栽培されていた。また、南東側に隣接する畑は最近盛土を行い、2段の畑を平坦化したものということで、ビニールハウスが建っている。地主の意向は、下部の砂を掘り起こして現在の耕作土と混ぜ、侵透性の高い耕作土にしてハウスを建て、野菜等を栽培するとのことであった。

## 第2節 層 序

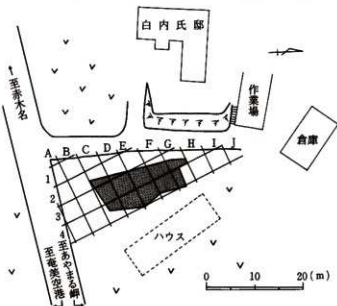
場所により若干異なるが、おおよその層序は下記のとおりである。

I層…表土(耕作土。各種の客土もある) II a層…茶褐色強粘質土。木炭、小礫混り。遺物包含層。 II b層…明茶褐色強粘質土。木炭、小礫、白色砂粒含む。 III層…明黄褐色砂。遺物包含層。 IV層…暗黄褐色砂。 V層…やや暗い黄褐色砂。遺物包含層。 VI層…明黄褐色砂で、III層より明るい。 VII層…やや暗い黄褐色で、V層より明るい。 VIII層…黄白色砂。

遺物包含層は、青磁・白磁・須恵器・陶器などが出土し、場所によっては2つに別れるII a層と、兼久式概当と思われるIII層、それに宇宿上層式及び面縄西洞式が出土するV層の3つの層があり、一部においては層の欠如等によりIII層とV層とが不明確なところも見られる。一応の目途として、II a層を中世に、III層を弥生~古墳、V層を縄文時代晩期頃に考えている。

## 第3節 概 要

本調査の契機となった人骨が出土した既掘部分を中心に4m方眼のグリッドを組み、南側からA、B…G、西から1、2…5として、E-3区のように呼称することにした。最初は包含層の残存状況を確認するためにエンプラによって削られ、VI層以下の無遺物層が露呈している場所を確かめて調査対象を決定した。その後、東西及び南北方向に帯部を幅50cmで残して、大きく4つのブロックとして全体的に層位に従って掘り下げていった。その結果、II層及びIII層上面から近世墓鉢2、中世土坑11、中世ピット17が確認され、中世及び中世以前の人骨が各1体検出され、また、III層下部からは小貝溜りが1か所に確認された。

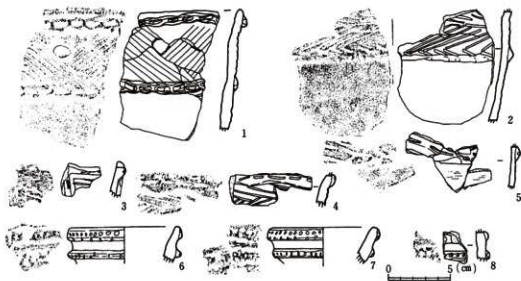


第4図 城遺跡グリッド配置図

#### 第4節 縄文時代

奄美諸島の土器については最近の発掘調査の急増に伴って除々にまとまりつつはあるが、まだ残念ながら確立はしていないというのが実情である。遺跡間あるいは遺跡相互間で層の比定及び遺物相互の比定が行われ、また、木炭・貝等によって<sup>14</sup>Cによる年代測定値が明らかにされつつあることは確かである。しかし、それでも各時代の文化、例えば縄文文化や弥生文化が大島の地域にいつ入って来たか、また、あったのかという根本的な問題をも含んでいる現状であるので、各時代毎に遺構・遺物、ひいては遺跡を論ずることができるかはなほ疑問ではある。本稿では主として河口貞徳氏の編年に従って各時代の遺物として取り扱い、形式の不明なもの、未設定のものについては、同一の包含層から出土したものはその時代に含め、それ以外のものは他の遺物及び層位等との関係から考慮して述べることにするが、遺跡が砂丘上に立地することから当然遺物の移動も考えられ、層の上下関係については確呼としたものではない可能性もあることを付け加えておき、今後の資料の増加と編年の確立に期待するものである。

以上のような状況を踏まえて、各時代（相当）の遺物・遺構について考察を進めて行きたい。縄文時代の包含層はV層と考えられ、面縄西洞式及び斜格子沈線文土器、その他V層出土の土器・石器・貝器などがある、G-4区に小さな貝溜りが出土したが、木炭・焼土等は見られず、また、周囲には礫が散布し、特にG-3区にはサンゴが3個重なって出土したが性格不明。



第5図 面縄西洞式土器

##### ・面縄西洞式（第5図 1～8）

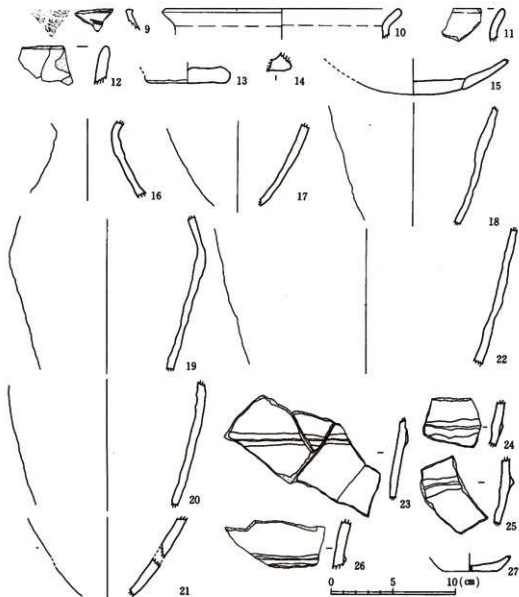
1は口縁近くとその下位に刻み突帯を付し、その間に斜位の沈線を施すものである。2は1に類似するが斜位の沈線が1より太い。3～5も1に類似した突帯に2のような沈線を配列し、3と4は突帯下にも同様な沈線を施す。3は横位だけでなく縦位の突帯ももつ。6と7は口縁直下に2列の、その下位には1列のそれぞれ列点をもつ突帯を有する褐色粗製の土器である。8も同様と思われる。1～8は何れも面縄西洞式に属すると考えられる。

・突帯を有する土器 (第 図 22~27)

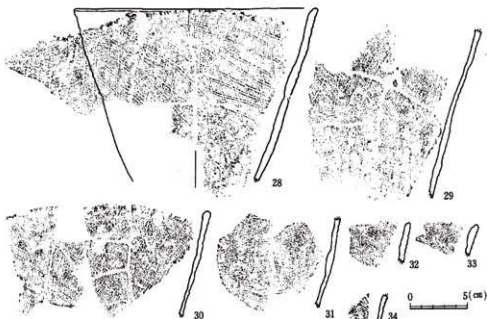
深鉢形土器と思われる器形の胴部に1条の貼り付け突帯をもつ。暗褐色を呈し、割合に粗である。27は同様な胎土・色調・焼成で、壺形土器の底部と思われる。

・その他の土器 (第 6 図 9~22)

9は黒褐色を呈する口縁部で、口縁下には2条の沈線が見られる。10・11はく字状に外反する口縁部で、端部は丸まる。12も丸まった端部をもつ口縁部であるが、ほぼ直口する。13・14は平底, 15は丸底の底部である。16~22は明褐色を呈する粗製の土器で、器壁の起伏が激しい。16は壺形土器の頸部, 17~22は深鉢形と思われる。19は胴部が張る。新しい可能性も残される。



第 6 図 縄文時代相当の土器



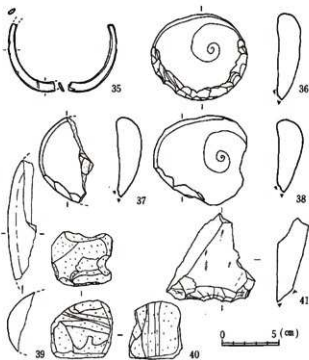
第7図 斜格子沈線文土器

・斜格子沈線文土器(第7図 28~34)

28~34は深鉢形土器である。丸味を帯びた口縁の下位に粗雑な斜格子状の沈線を施す。口縁から胴部にかけてはほぼ直線的にすばまり、下部へは若干内傾する。器壁は起伏が激しく、特に内面は顕著である。同一個体と思われる。あやまる第2貝塚など類例がある。

・石・貝製品(第8図 35~41)

35は貝輪の一部で、オオツタノハ製と思われる。36~38は螺蓋製貝斧で、36は刃部の使用が多く、38は磨減が著しい。39は磨石の破片と思われる。地域によってクガニイシと呼ばれるものと同じであろう。41は剥片利用の石器で、石材は39と同様、砂岩である。40は軽石製の加工器で、やや黄色を帯びており、鋭利なもので半円形及び三角形の溝が掘られている。

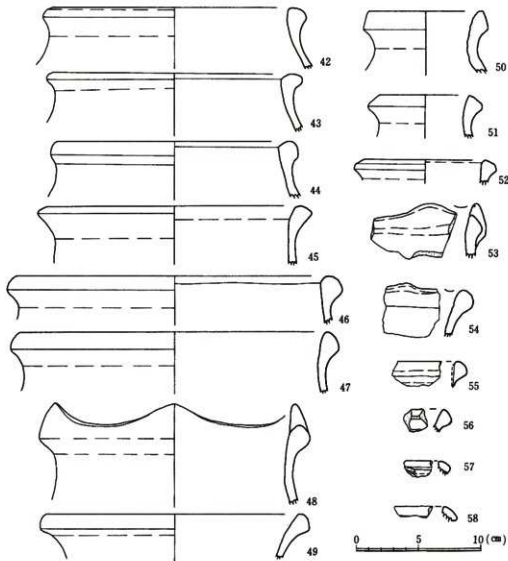


第8図 石・貝製品

## 第5節 弥生～古墳時代

### ・宇宿上層式 (第9図 42～58)

口縁部が肥厚し、器面に文様を施さず、胎土は精選されている。器形は甕形土器(42～49・53・54)、壺形土器(50～52)があるが、55～58は小片のため器形は不明である。甕形土器のうち42～44は口縁が内傾するもので、全て平縁である。46がほぼ直口、45・47～48・53・54はやや外反する。殊に48・53・54は波状を呈しており、48は隆起部の間隔から4つの隆起をもつものと思われる。断面は丸まった四角形ないしは三角形を呈しており、中に43のように大きく外に引き出すものも見られる。53は断面三角形となる。壺形土器も断面は三角形に近いが、52は台形状である。頸部からやや外反する程度の口縁であり、52は残存部で見える限り直口に近い。55～58は磨耗及び剥落しているが、形状は上記のものとは大差ない。全て明褐色を呈している。



第9図 宇宿上層式土器

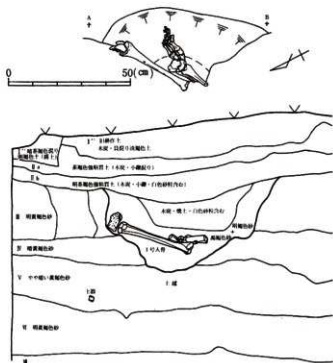


第10図 兼久式土器ほか

土は砂粒を含み焼成はやや粗。65~68の底部は端部がやや突き出る。59~69は全て壺形土器であろう。70は異質であるが、内面は刺離し、外底に貝殻条痕をもつ底部で、時期不明である。

○1号人骨 (第11図)

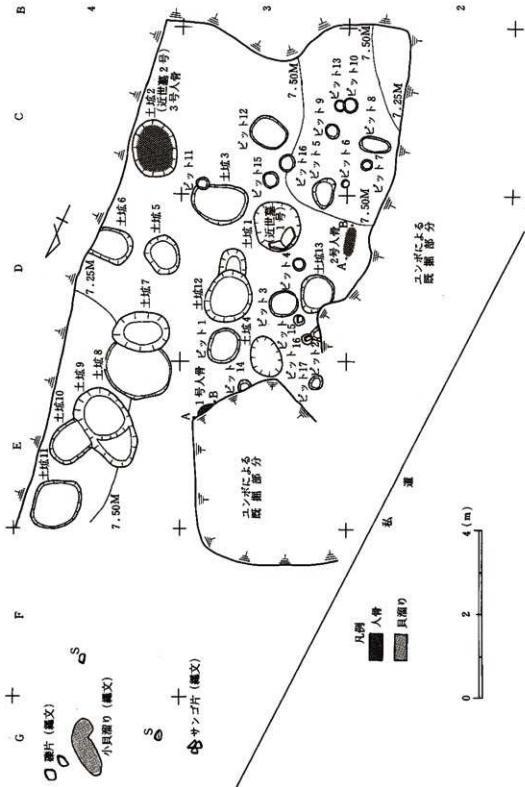
本遺跡発見の契機となった人骨である。E-3区南東隅の既掘部分に検出された。Ⅲ層に掘り込まれた残存径70cm、深さ約35cm程の土壇内に大腿骨などが見られ、上体の骨は失われている。屈葬と推定される。土壇はⅢ層上面から掘り込まれ、整然としたものではない。埋土は明褐色砂と濁褐色砂が混じり、Ⅲ・Ⅳ層に比定できよう。上部には木炭・焼土が見られるが、下部は濁り、木炭も少なくなる。Ⅲ層を掘り込み、Ⅱ層よりは古いことから、弥生~古墳時代よりは新しく、中世までの間のものと推定されるが、時期は確定不能。



第11図 1号人骨出土状況

・兼久式土器ほか (第10図 59~70)

59は口縁部近くに刻み目を有する突帯、64も貼り付け突帯を付し、65~69は木の葉の圧痕を有する底部であることから典型的な兼久式土器として捉えられる。60~63も、層間的にも、形態・焼成などからも兼久式土器の範疇に入ると思われる。59は外反する口縁の端部が角張り、胎土には石英・砂粒を含み、暗褐色を呈するが、外面は赤褐色が斑状に付着している。60~63は外反する形態の口縁部で、62は小波状ないしは小隆起部をもつ。64は貼り付け突帯を有する。65は褐色を呈し、胎土にはサング粉を含み焼成良好である。66は底部の木の葉痕が顕著であるが、胎



第12図 城跡跡遺構配置図

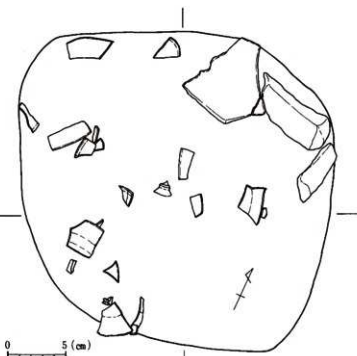
## 第6節 中世

遺構はピット17基、土坑11基が確認され、遺物は青磁・白磁・染付・陶磁器のほか南島で焼かれたいわゆる類須恵器等が出土した。

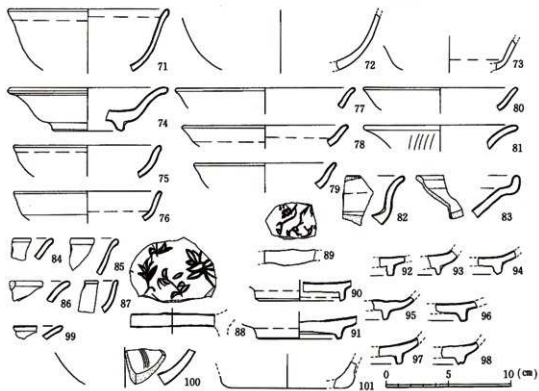
### (1) 遺構 (第12図)

#### ・ピット

Ⅱb層に掘り込まれ、Ⅱa層を理土とする。径20~90cm、深さ15~76cm、形も円~楕円形と様々である。建物の可能性も考えたが、個別のものとは判断した。青磁や陶器等のほか羅羽口等も出土しており、製鉄との関係も考えられよう。



第13図 ピット3 検出状況



第14図 ピット内出土遺物 (73~100 …… ピット3, 101~103 …… ピット12)



・ピット3 (第13図)

ピット状の遺構は多数検出されたが、形態が不揃いで、時期も明確ではない、その中にあって、ピット3からは青磁片が割合にまとまって検出されたので、出土状況等につき詳述したい。

ピット3は径約55cmの円形を呈し、埋土の上面5cm程度に灰・炭を含む黒褐色土層を作り、その中から青磁片が出土している。遺物については、(2)遺物の項で説明を加えることにする。

サンゴ塊3個が配され、炉跡の可能性が考えられるが、下面には焼土などは認められなかった。

・ピット内出土遺物 (第14図 71~101)

71~98がピット3、99~101はピット12出土の遺物で、他には図化しうるものはなかった。

なお、輪羽口は一括して後述する。71~98は青磁である。71は復元口径13cmを測る碗で磁胎は灰色、淡青灰色の色調を呈する。74は濁褐色の混じった淡青色の釉がかかる碗である。77は口縁部が丸く肥厚し、淡青色の釉がかかる。79は濁褐色、78は濁青色。78~81は皿かと思われる。81は口縁部が外反する。82は碗、83は盤であろう。14世紀~15世紀に比定されている。84~87は碗の口縁部で、形態には差が見られる。88及び89は内底に刻花文を付す。90~98は底部であるが、疊付の部分まで釉のかかるもの(91・96~98)も見られる。99は碗の口縁、100は内面に柳描文が見られる。101は滑石混入の土器である。

第2表 ピット

第3表 土 城

No.	区	長 径	短 径	深 さ	主 な 遺 物	No.	区	長 径	短 径	深 さ	主 な 遺 物
1	D-3	90	74	29	陶器片・輪羽口	1	D-3	123	107	161	近世墓-青磁・瓦器等
2	"	84	40	15	気泡スラグ	2	C-4	135	105	65	近世墓-人骨・陶磁器等
3	"	70	62	76	青磁・陶器・滑石製品等	3	C-D-3	135	97	80	輪羽口・不明土器
4	"	32	32	21		4	D-E-3	98	74	60	類須恵器・気泡スラグ
5	C-D-3	75	53	38		5	D-4	96	71	76	瓦器・青磁・類須恵器等
6	C-3	20	18	28		6	"	60	80	108	滑石片・魚骨・獣骨
7	C-2	30	27	42		7	"	137	96	69	
8	"	77	38	40	鉄片・土師器・魚骨	8	D-E-4	161	(140)	61	青磁・不明土器・魚骨
9	C-3	40	32	32	青磁	9	E-4	268	(230)	72	青磁・類須恵器・滑石器等
10	C-2-3	38	36	31		10	"	60	87	34	青磁・魚骨
11	C-3	32	32	18	青磁	11	"	140	115	41	青磁・類須恵器・魚骨
12	"	89	73	65	青磁・釘・不明土器	12	D-3	178	106	140	土師器・陶器・類須恵器等
13	"	29	28	18		13	"	96	85	95	
14	E-3	33	29	38		* 径及び深さの単位はcm。 * ( ) 書きは残存計測値であり、推定値ではない。 * 不明土器は形式不明の土器の意味。 * 土城1・2は近世墓。					
15	D-3	41	39	33							
16	"	43	39	48							
17	E-3	40	32	17							

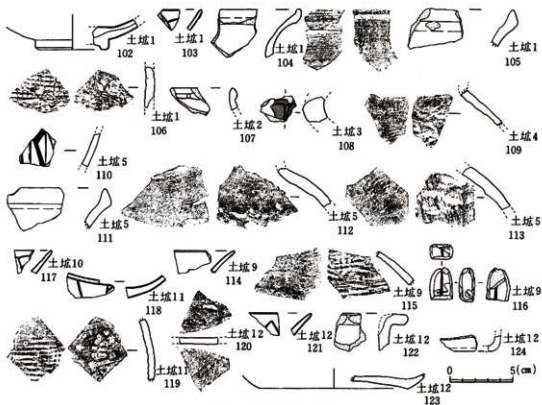
## ・土 塚

中世の土塚は3～13までの11基で、1と2は近世墓である。楕円形及び不整形なものが多く、径は70～200cm、深さも30～140cmとまちまちである。埋土からは類須恵器・青磁・瓦器のほか彌羽口、スラグや魚骨なども出土する。

### ◦土塚内出土の遺物 (第15図 102～123)

102～106が土塚1、107は土塚2、108は土塚3、109が土塚4、110～113は土塚5、114～116は土塚9、118・119が土塚11、120～123が土塚12からの出土で、他は図化しうるものはなかった。なお、土塚1及び2は近世墓であるが、埋土に含まれたもののうち明らかに中世に属するものについては掲載した。これは墓塚を埋める際に混入したものと思われる。

102は青磁の碗で、畳付まで軸が一部にかかる。103・110・117・118・121も青磁の碗で、蓮弁文が見られる。104は類須恵器の壺の口縁部、形態は異なるが107も同様であろう。109・112は肩部、120は底部で、何れも壺と推定される。これらは、カムイヤキ古窯出土のものと同形態や焼成等が類似していることから、供給源をカムイヤキに求めて大過ないものと思われる。105、111は瓦器で、鉢状のものの口縁部である。123は土師器の皿で、若干底が上がる。116は滑石製の加工品で鋭い刻みを縦に廻らし、形態的には石鐮に似ている。124は滑石混入土器で、煤の付着が認められる。滑石製の石鐮を模したものかとも思われるが、確かではない。



第15図 土塚内出土遺物

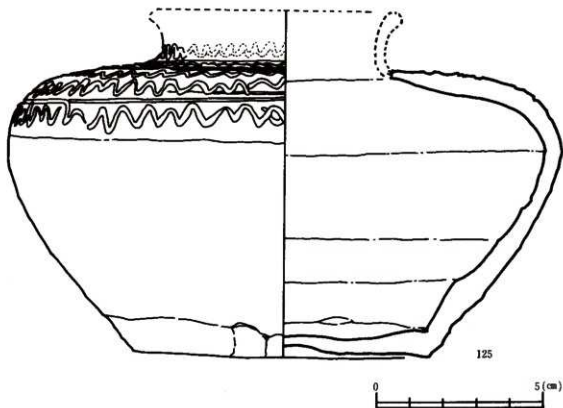
## (2) 遺物

ここでは、ピット・土坑以外の出土遺物を主として取り扱い、一部、竈羽口など遺構埋土から出土したものも掲載し、説明を加えることにする。類須恵器・青磁・白磁・染付・滑石製品及び滑石混入土器・竈羽口の順に説明を行っていく。

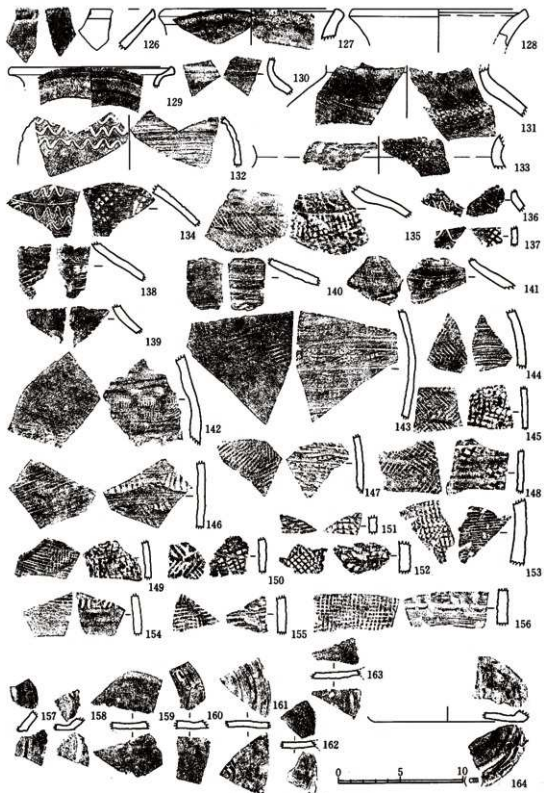
### ・類須恵器 (第16図 125~164)

125は、ユンボによる掘削中に出土したもので、口縁部を欠くがほぼ完形である。口縁部及び底部に比して肩が大きく張る壺で、頸部径6.8cm、胴部最大径16.7cm、底部最大径9.0cmを測り、頭部から肩部にかけてはほぼ平らとなり、2条の寛描沈線をはさんで、5条の波状の寛描沈線文が施文されている。胎土は暗灰色、外面は淡灰色を呈する。

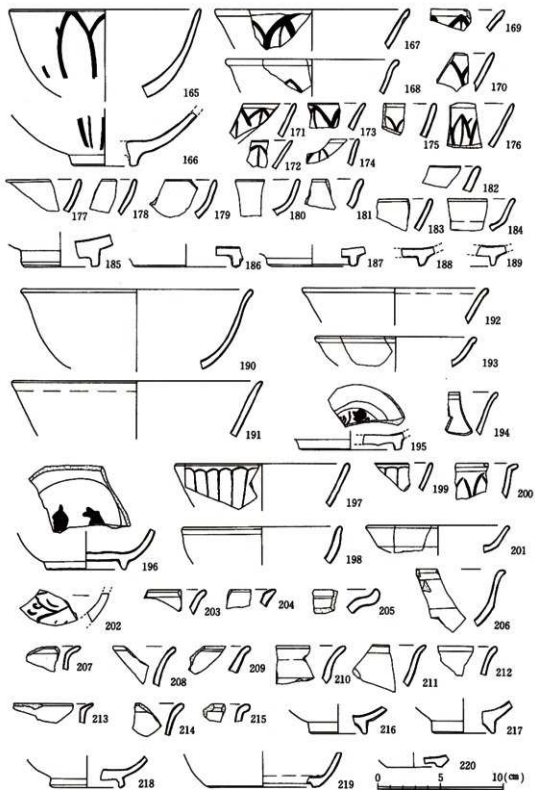
126は碗で、玉縁状の口縁であることから、12世紀頃の白磁碗を模倣して作られたものと推定されている。127・128は太い口縁をもつ壺、129はアリケートな形態の壺である。130~141は壺の頸部~肩部と思われる。132・134・136・137は外面に寛描波状沈線文が施されている。142~156は胴部。外面に平行叩き(146など)、内面に格子叩き(145など)の残るものがあるが、叩き目をナデ消してあるものも多い。157~164は底部で、厚さや大きさ等から壺と思われる。これらは波状沈線文及びサンドイッチ状になった断面、青灰~暗褐色の色調などから、カムイヤキ古窯のものと推定して大過ないように思われる。



第16図 類須恵器 (1)



第17圖 類須恵器(2)



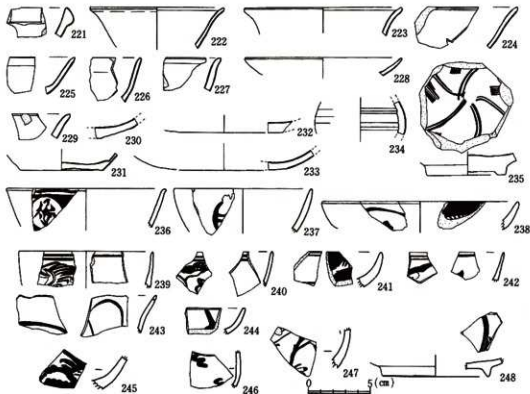
第18圖 青 磁

・青磁（第18図，165～220）

165～176は外面に蓮弁文を有する碗で，13世紀後半～14世紀前半に比定されている。165は褐色の釉がかかるもので，磁胎は黄白色である。167は淡青色の釉に明灰色の磁胎で稜が高い。166は疊付の部分は露胎となり，磁胎は明灰色，釉は淡青色で内外面共に大まかにヒビが入る。171は濁灰色の磁胎，濁褐色の釉。175は内面に蓮弁と思われる文様が見られ，口縁端部は丸味をもつ。177～184は外面に文様の見られない碗の口縁部で，概して端部は丸味をもつ。182は黄白色の磁胎に暗緑褐色の釉で，内外面共に細かなヒビが入る。185～189は底部であるが，186～188は疊付まで施釉が見られる。190は灰色の磁胎に濁緑色の小さなヒビ釉がかかり，口縁端部が丸味を帯びて若干反る。191は明褐色の磁胎に濁淡灰色の釉で，磁器のようにも見える。193は玉縁状となり，短く反る。185は印花文の碗で，文様部分は露胎。196は魚（怪魚？）をあしらった立体的な文様を内底に施すもので，疊付の部分のみ露胎である。197・198の蓮弁は先が丸まり，200は離れる。202は外面に文様が付く。204・205は盤であろう。219は壺か。城遺跡出土の青磁はⅠ層に15世紀後半～16世紀の遺物が多く，Ⅱa層の上部が13世紀後半～14世紀前半，下部が13世紀前半のものが多いとの教示を亀井先生より得た。

・白磁（第19図，221～235）

221は玉縁状の口縁を有する碗で，淡黄色の磁胎，黄白色の釉がかかり，12～13世紀に比定される。222～226は口ハゲの碗といわれるもので，13～14世紀のものとする。222は露胎部



第19図 白磁・染付

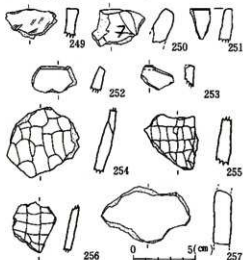
は淡濁灰色、淡灰色の釉、227は口縁端部が僅かに反る。228は皿・231は口ハゲの小皿で饅頭様の底部、淡灰色の磁胎に淡白色の釉が外底の一部にもかかる。234は小壺と思われ、235は柳描文碗で12～13世紀に比定される。本遺跡の白磁は12～14世紀前半のものということである。

・染付 (第19図, 236～248)

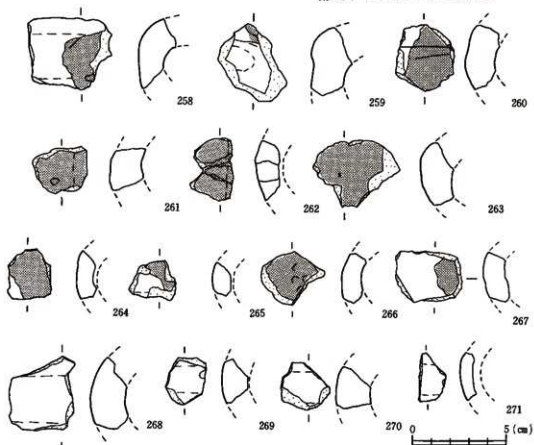
236は五彩磁で、口縁下の2次の横線、円、円内の文様は赤、円の外側は緑色の彩色である。16世紀に比定される。237は16世紀以降の染付碗。文様は破片のため不明確なものが多いが、240は松の文様に似、246は鳥または雲を模したものか。器種としては、碗がほとんどと思われる。

・滑石製品・滑石混入土器 (第20図, 249～257)

249は灰色、250は淡赤褐色を呈し、何れも滑石製の石錆の破片であろう。251～257は滑石混入土器であるが、器形及び用途は不明である。254～256は削り調整の痕跡が明瞭である。



第20図 滑石製品・滑石混入土器



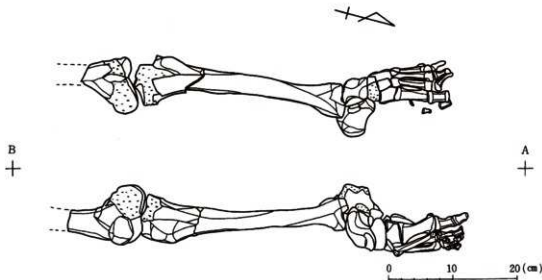
第21図 輪 羽 口 (アミ部はスラグ等の附着部分)

・鑄羽口 (第21図, 258~271)

Ⅱ a 層及び土坑・ピットからの出土で、他に気泡のあるスラグも出土することから、本遺跡が製鉄に関連のあることが窺える。258~260は断面は丸味を帯びた四角形を呈するものであるが、送風口は円形である。261~271は断面形及び送風口も円形である。図中アミ部はスラグ等の付着している箇所である。何れも破片で全体の形状や長さ、大きさ等は不明である。胎土にサンゴ粒を含むものがほとんどであることから、当地近辺で製作されたものと推定される。

◎2号人骨 (第22図)

D-2・3区境に検出されたもので、大腿骨下部以下の骨が残存し、これより上の骨格は滅失している。土坑の検出に努めたが、結局不明であった。しかし、埋土はⅡ a 層であること、人骨が置かれていた直下から約8cmでⅢ層となること、Ⅱ b 層に若干掘り埋められたと思われる箇所があること、上体があつたと推定される部分にⅡ a 層の推積が見られることなどから、この人骨は中世の早い時期に埋葬され、長く経たない時期に上体を削り取られたものと推定される。頭位は南で、伸腿葬である。大腿骨と下腿部のつけ根は一部削られて割れを生じている箇所も見られる。踵は内側を向き、足の先端は外側を向いていることから、O脚状に葬られたものと思われる。左側の足の指の骨が一部バラバラになっている。骨全体としては平らな状態で出土したので、骨の高い部分が削られているということから埋土はそれほど深くなかった可能性もある。大腿骨の割れ口はそれほど微小になっていないことから、この人骨の上体を削り取った道具はかなり鋭利なものであつたと思われる。



第22図 2号人骨出土状況



## 第7節 近世

### (1) 遺構

#### 土坑1 (近世墓1号) (第23図)

D3区の南寄りの直径約110~120cmのはほぼ円形の土坑状の遺構である。

上面の検出面の土坑内の埋土中には、人頭犬の自然礫砂岩2個が確認されている。

土坑は、基盤の白砂層に、ほぼ垂直に約160cmの深さまで掘られている。上部に黒褐色の腐植土混砂層が堆積し、中部には斜めに黄色砂層が、下部には黒色の腐植土混砂層が堆積している。土坑底面は、平坦である。土坑内からは、遺物等の出土は見られない。

この土坑1は、調査中には性格不明の土坑として取り扱ったが、土坑2と同様の掘り方がみられ人骨が発見されることから近世の墓の可能性が考えられる。土坑の検出面や埋土の状態から近世と考えられる。

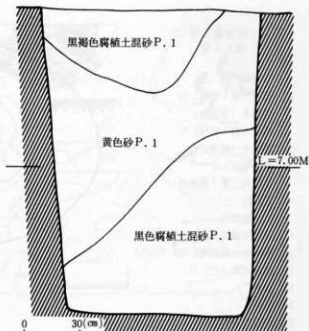
#### 土坑2 (近世墓2号・◎3号人骨) (第24図)

C4区の西側に、径約130×115cmの円形(やや楕円)の土坑状の遺構である。土坑の上面は、後世の削平を受けて残存部の深さは約70cmを測る。

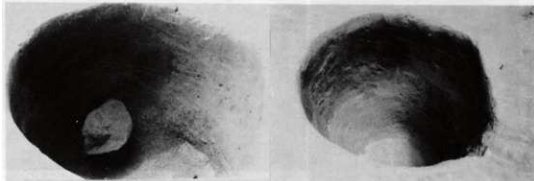
土坑の埋土の黒色腐植土混砂層中には、約30片の人骨片が検出された。人骨片は、土坑の底面近くを中心に、浮遊した状態で検出されている。

人骨は、細片であり、表4のような部位になっている。<sup>註1</sup>人骨の部分では残存しにくいところが検出されており、本来、残存し易い人骨の部分が発見されていないところから洗骨跡の可能性が考えられる。

註1 小片丘彦教授教示。



第23図 近世墓1号

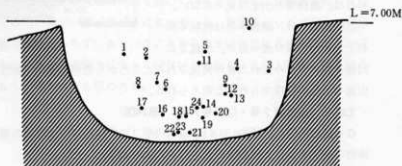


参考4 土坑1 検出状況 (1)

参考5 土坑1 検出状況 (2)

表4 近世墓2号  
出土人骨

- 1 大腿骨下端(左)
- 2 颈椎(第1頸椎)片
- 3 足指骨(基節骨)
- 4 颈椎(第1頸椎)片
- 5 足根骨(踵骨,右)
- 6 寬骨(左)片
- 7 手指骨(第5基節骨)
- 8 仙骨片
- 9 上位肋骨片
- 10 上胸骨頭片
- 11 手根骨(有鈎骨,右)
- 12 桡骨下端(右)片
- 13 仙骨片
- 14 仙骨片
- 15 長骨骨體片
- 16 大腿骨頭(左)
- 17 腰椎體片(2)
- 18 足根骨(舟狀骨,左)
- 19 仙骨片
- 20 椎體片, 大腿骨頸部
- 21 尺骨體(左)片
- 22 膝蓋骨(右)
- 23 下位肋骨(右)片
- 24 第4中手骨(左)



第24圖 近世墓2号(3号人骨)

参考6

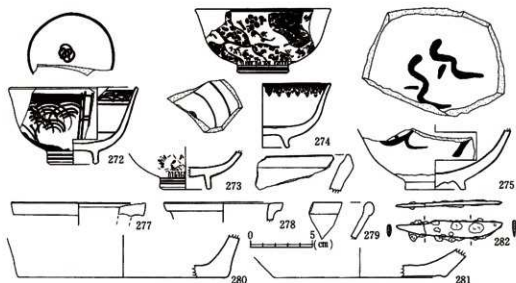


小片教授による1号人骨検出作業

参考7



平板実測作業



第25図 磁器・瓦器・陶器・刀子

(2) 遺物

近世及び以後のものである。

・磁器 (第25図, 272~275)

272は伊万里焼の碗で、淡灰色の釉に、格子及び草様のものが濃青緑色に描かれており、内面にも文様が施され、18~19世紀のもの。275は唐津焼で、褐色の磁胎に灰色の釉、黒に近い色で外面及び内底に文様を描く。274は近世以降のものと思われ、外面に梅や竹、波、その他の文様が、内面にも文様が描かれるが、これはプリントによるものと推定される。273も同様である。

・瓦器 (第25図, 276)

鉢と思われ、外面暗灰色、内面淡灰色を呈する口縁部には、煤と見られるものが附着している。

・陶器 (第25図, 277~281)

277・278は口縁部がやや角張るもので壺と思われ、279は口縁部が丸まっており、鉢と推定される。280は内外面共に黒色を呈し、内面には黄白色の小斑が見られ、281は両面共に紫褐色を呈し、何れもこね鉢と思われる。277~279は淡紫褐色の色調である。

・鉄器 (第25図, 282)

近世墓2号から出土したもので、長さ8.4cm、刃幅1.3cm、刃厚2.5mmを測し、鉄製の刀子と思われる。背部に鬩を有し、身幅は中心部で広くなる。茎尻はやや丸味を帯びた三角形を呈し、断面は楕円形気味である。錆塊が多く、きつききから中ほどにかけて錆により膨らんでいるが、全体的に残存状況は良い。

## 第8節 小 結

城遺跡の発見のきっかけは、地主による土砂の入れ替えのために重機（エンボ）で土を掘り上げた際に人骨が出土したことであった。いち早く人骨発見の報を町歴史民俗資料館に連絡され、町の教育委員会は文化財保護審議会に諮り、遺跡の大事なことが確認されて現状保存の措置が講じられて、今回の調査となったもので、地主さんの早急な通報や保存のために工事の中止などの適切、機敏な対応に先ず感謝したい。また、人骨については鹿児島大学歯学部の小片教授によって採集・調査を行うなど、適切な処置がとられた。

本遺跡の名称（字名）である城については、奄美諸島及び琉球諸島にその名が付された遺跡が分布するが、それらは一般に地名をとって〇〇城と呼ばれている。字義から、また中世という時代を考慮して、中世の城と考えられることが多いが、「聖域説」や「集落説」などの説もあり、「グスク論争」として展開中である。本遺跡—城遺跡—についても、地元の研究者等により、城あるいは按司の居館などに位置づけられたりしてはいるが、現在の状況が耕地整理や道路の拡幅などの土木工事によって地形が大きく変化しているため、旧地形を復元推定することは困難である。従って、城なのか、聖域なのか、集落なのかについては結論を出しえない。ただ言えることは、標高がそれほど高くなく、周囲との比高差もそれほどないこと、石垣を構築した形跡は見られないこと、現在の地形から見てそれほど規模が大きいとは考えにくいことなどから、城に関連があるにしても居館や小規模の縄張りをもつ砦的施設であっただろうと思われる。

本遺跡から出土した人骨は、1号人骨が中世以前のもので弥生～古墳時代より新しい楕円形と思われる土壇に屈葬された壮年女性、2号人骨は中世のもので、土壇不明瞭な伸展葬の熟年男性、3号人骨は近世の土壇墓中よりバラバラの人骨片として出土し、壮年男性と推定される。そのほか、近世土壇墓がもう1基検出されたが、人骨の出土はなく改葬跡と思われる。また、隣接の県道（佐仁万屋赤木名線）の工事中にも人骨の出土があったと聞けが詳細は不明である。

中世の遺構としてピット17基、土壇11基が確認されたが、建物跡と断定できなかった。青磁片を大量に出土したピット3は、注目に値する。また、ピットその他から鉄滓やスラグ、輪切口などが出土している点、製鉄との関連で注目される。類須恵器については、伊仙町のカマイヤキ古窯のものか、また「類須恵器」という名称も今後の課題といえよう。

兼久式土器がどこまであるか、滑石混入土器の器形はどうか、面縄渦式土器の器形・文様のバリエーション、それに斜格子沈線文土器と仮称した土器の編年など、多くの問題は残ったままとなったが、今後の資料の増加を待ち、これらのことについて考察・研究が発展するよう祈りたい。宇宿上層式についても、早急な編年の確立が待たれる。

註1 【地方史研究】196 第35巻4号「防衛より発生した初期グスク」名嘉正八郎・知念勇

2 鹿児島大学歯学部 小片丘彦教授の教示による。

3 調査中に地元の東テルミさん（当時の道路工事従事者）より聞いた。

4 南島の窯の発見は現在のところここと同町のヤナギガ窯だけである。名称は、他に須恵質陶器などがある。

番号	出土区	層位	形 式	器種	備考	番号	出土区	層位	形 式	器種	備考	番号	出土区	層位	形 式	器種	備考
1	C 2	V	田圃西列	漆鉢		48	D 2	■	宇面上層式	漆鉢		95	ビット3	埋土	青磁	碗	
2	F 4	"	"	"		49	D 3	"	"	"		96	"	"	"	"	
3	"	"	"	"		50	F 3	V	"	"	壺	97	"	"	"	"	
4	"	"	"	"		51	F 3	V	"	"	"	98	"	"	"	"	
5	"	"	"	"		52	C 2	V	"	"	"	99	ビット12	"	"	鉢?	
6	C 2	"	大田布式			53	"	■	"	"	漆鉢	100	"	"	"	"	碗
7	"	"	"			54	"	"	"	"	"	101	ビット12	"	"	滑石土器	
8	"	"	"			55	D 2	"	"	"	漆鉢?	102	土埵1	埋土	青磁	碗	
9	F 4	V		漆鉢?		56	表坑	I	"	"	"	103	"	"	"	"	"
10	C 2	"		漆鉢		57	C 2	■	"	"	"	104	"	"	銅灰磁器	壺	
11	土埵1	埋土		"		58	"	V	"	"	"	105	"	"	瓦器	鉢?	
12	F 4	V		"		59	D 3	I	兼久式	壺		106	"	"	銅灰磁器	壺	
13	C 2	"		"		60	C 3	I a下	"	"	壺?	107	土埵2	"	銅灰磁器	壺	
14	"	"		"		61	D 3	■	"	"	"	108	土埵3	"	鑄物口		
15	F 4	"		壺?		62	ビット12	埋土	"	"	"	109	土埵4	"	銅灰磁器	壺?	
16	C 3	"		壺		63	土埵1	"	"	"	"	110	土埵5	"	青磁	碗	
17	D 3	■		漆鉢		64	C 3	I a下	"	"	"	111	"	"	瓦器	鉢?	
18	E 4	V		"		65	D 3	"	"	"	鏡	112	"	"	銅灰磁器	壺?	
19	C 2	"		漆鉢?		66	C 3	"	"	"	"	113	"	"	"	"	"
20	"	"		漆鉢		67	D 3	■	"	"	"	114	土埵9	"	青磁	碗	
21	"	"		"		68	C 3	I a下	"	"	"	115	"	"	銅灰磁器	壺	
22	D 23	"		"		69	C 2	I a上	"	"	"	116	"	"	滑石製品	加工品	
23	D 2	■	足村実器大	漆鉢		70	C 4	I a下	"	"	壺?	117	土埵10	"	青磁	碗	
24	C 2	I	"	"		71	ビット3	埋土	青磁	碗		118	土埵11	"	青磁	碗	
25	"	■	"	"		72	"	"	"	"	"	119	"	"	銅灰磁器	壺	
26	D 3	"	"	"		73	"	"	"	"	"	120	土埵12	"	銅灰磁器	壺?	
27	C 2	V	"	漆鉢?		74	"	"	"	"	鉢	121	"	"	青磁	碗	
28	F 4	V	根巻子穴線文	漆鉢		75	"	"	"	"	皿?	122	"	"	陶器	鉢	
29	"	"	"	"		76	"	"	"	"	"	123	"	"	土器	皿	
30	"	"	"	"		77	"	"	"	"	碗?	124	"	"	滑石土器		
31	"	"	"	"		78	"	"	"	"	"	125	既 測分	I a?	銅灰磁器	壺	
32	"	"	"	"		79	"	"	"	"	"	126	D 4	I	"	碗	
33	"	"	"	"		80	"	"	"	"	"	127	E 4	"	"	壺	
34	"	"	"	"		81	"	"	"	"	鉢?	128	"	I a上	"	"	
35	D 2	■	貝製品	貝輪		82	"	"	"	"	碗	129	C 3	"	"	"	
36	E 4	V	"	銅製銅貝弁		83	"	"	"	"	鏡	130	"	I a下	"	"	
37	D 3	■	"	"		84	"	"	"	"	碗	131	E 3	I a上	"	"	
38	C 2	V	"	"		85	"	"	"	"	"	132	D 3	"	"	"	
39	ビット3	埋土	石部	磨石		86	"	"	"	"	"	133	D 2	I a下	"	"	
40	C 4	■	石製品	磨石加工品		87	"	"	"	"	"	134	C 2	I a上	"	"	
41	D 3	■	石部	銅器		88	"	"	"	"	"	135	C 3	"	"	"	
42	C 2	■	宇面上層式	漆鉢		89	"	"	"	"	"	136	C 4	I	"	"	
43	土埵1	埋土	"	"		90	"	"	"	"	"	137	"	"	"	"	
44	F 4	V	"	"		91	"	"	"	"	"	138	C 3	I a上	"	"	
45	D 3	■	"	"		92	"	"	"	"	"	139	D 3	I	"	"	
46	D 2	"	"	"		93	"	"	"	"	"	140	F 3	V?	"	"	
47	C 2	"	"	"		94	"	"	"	"	"	141	C 3	I a上	"	"	

番号	出土区	層位	形 式 類	器種	備考	番号	出土区	層位	形 式 類	器種	備考	番号	出土区	層位	形 式 類	器種	備考
142	D3	Ⅱa上	類聚形器	壺		189	E4	Ⅰ	青磁	甕		236	C3	Ⅱa上	赤胎	甕	
143	C3	"	"	"		190	C-D-3	Ⅱa上	"			237	C4	Ⅱa下	染付	"	
144	E4	Ⅰ	"	"		191	D3	"	"			238	E4	Ⅱa上	"	"	
145	C3	Ⅱa上	"	"		192	C3	Ⅱa下	"			239	C3	Ⅰ	"	"	
146	"	Ⅰ	"	"		193	D3	Ⅱa上	"			240	D3	"	"	"	
147	D4	"	"	"		194	G3	Ⅰ	"			241	E4	"	"	"	
148	D3	"	"	"		195	D3	Ⅱa上	"			242	C3	"	"	"	
149	D4	Ⅱa上	"	"		196	"	Ⅱa下	"			243	D5	"	"	"	
150	D4	Ⅰ	"	"		197	E4	Ⅰ	"			244	D4	Ⅱa下	"	"	
151	C3	Ⅱa上	"	"		198	E3	Ⅱa上	"			245	"	Ⅰ	"	"	
152	C3	"	"	"		199	F3	Ⅰ	"			246	C2	Ⅱ	"	"	
153	"	Ⅰ	"	"		200	C3	Ⅰ	"	甕		247	D4	Ⅱa下	"	"	
154	D4	Ⅱa上	"	"		201	D3	Ⅱa上	"	"		248	C4	Ⅰ	"	"	
155	C3	"	"	"		202	C3	"	"	"		249	E4	Ⅱa下	滑石類入 土器	鉢?	
156	D3	"	"	"		203	D3	Ⅰ	"	"		250	D4	Ⅰ	"	"	
157	"	Ⅰ	"	壺?		204	C3	Ⅱa上	"	"		251	D3	"	"	鉢?	
158	C3	Ⅱa上	"	"		205	D3	"	"	甕		252	"	"	"	"	
159	D3	"	"	"		206	C3	Ⅰ	"	甕		253	"	Ⅱa上	"	"	
160	E3	"	"	"		207	C4	Ⅱa下	"	"		254	E4	"	"	"	
161	E4	Ⅰ	"	"		208	C3	Ⅰ	"	"		255	C3	Ⅰ	"	"	
162	D3	"	"	"		209	E4	"	"	"		256	"	Ⅱa上	"	"	
163	"	Ⅱa下	"	"		210	"	"	"	"		257	D3	Ⅱa下	"	"	
164	D4	"	"	"		211	D3	"	"	"		258	E3	Ⅱa上	輪郭口		
165	D3-4	Ⅱa下	青磁	甕		212	美保	"	"	"		259	D3	"	"	"	
166	D3	"	"	"		213	E4	"	"	"		260	C2	Ⅱa下	"	"	
167	"	Ⅱa上	"	"		214	D4	"	"	"		261	C3	Ⅰ	"	"	
168	"	"	"	"		215	D3	Ⅱa上	"	"		262	美保	"	"	"	
169	"	Ⅰ	"	"		216	"	"	"	"		263	D3	"	"	"	
170	F4	3	"	"		217	"	"	"	"		264	C3	Ⅱa上	"	"	
171	C3	Ⅱa上	"	"		218	D4	Ⅱa上	"	"		265	E4	Ⅰ	"	"	
172	E4	Ⅰ	"	"		219	C4	Ⅰ	"	"		266	C3	Ⅱa上	"	"	
173	D4	Ⅱa上	"	"		220	D4	"	"	"		267	E4	"	"	"	
174	C2	"	"	"		221	D4	"	白磁	甕		268	E3	Ⅱa下	"	"	
175	"	Ⅱa下	"	"		222	C3	Ⅱa上	"	"		269	C3	Ⅱa上	"	"	
176	C3	"	"	"		223	D4	Ⅰ	"	"		270	D3	Ⅱ上	"	"	
177	D3	Ⅰ	"	"		224	D3	Ⅱa上	"	"		271	C4	Ⅰ	"	"	
178	E4	Ⅱa上	"	"		225	C3	Ⅱa下	"	"		272	C4	2	磁 器	甕	
179	美保	Ⅰ	"	"		226	F4	Ⅰ	"	"		273	"	"	"	"	
180	C3	Ⅱa下	"	"		227	D3	Ⅱa下	"	"		274	"	"	"	"	
181	"	Ⅰ	"	"		228	D-E4	Ⅱa上	"	甕		275	D3	"	"	"	
182	E4	"	"	"		229	D4	Ⅰ	"	甕		276	D4	Ⅱa上	瓦器	鉢?	
183	D3	Ⅱa上	"	"		230	F3	"	"	"		277	D3	Ⅰ	陶器	壺?	
184	C3	Ⅱa下	"	"		231	D3	Ⅱa上	"	"		278	C3	Ⅱa上	"	"	
185	D4	Ⅰ	"	"		232	"	"	"	"		279	E4	Ⅰ	"	鉢	
186	D3	Ⅱa上	"	"		233	"	Ⅰ	"	"		280	C2	Ⅱ	"	"	
187	C4	Ⅰ	"	"		234	D5	"	"	"		281	D4	Ⅱa上	"	壺?	
188	D4	Ⅱa上	"	"		235	D3	Ⅱa上	"	"		282	土器 土器	埴土	鉄器	刀子	

シモ ヤマ ダ  
下山田遺跡





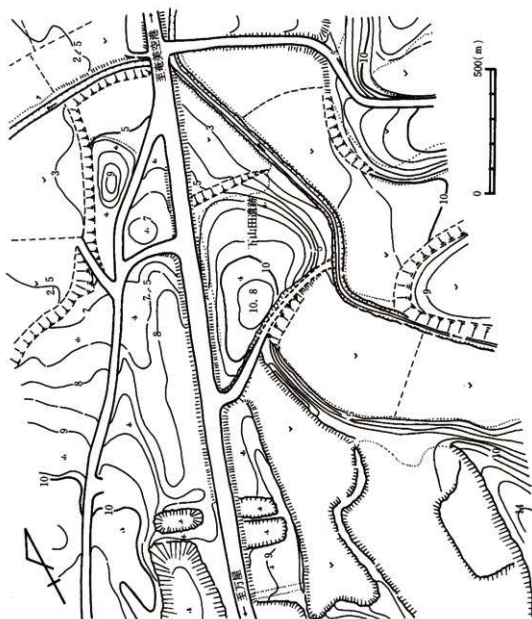
## 第4章 下山田遺跡

### 第1節 位置

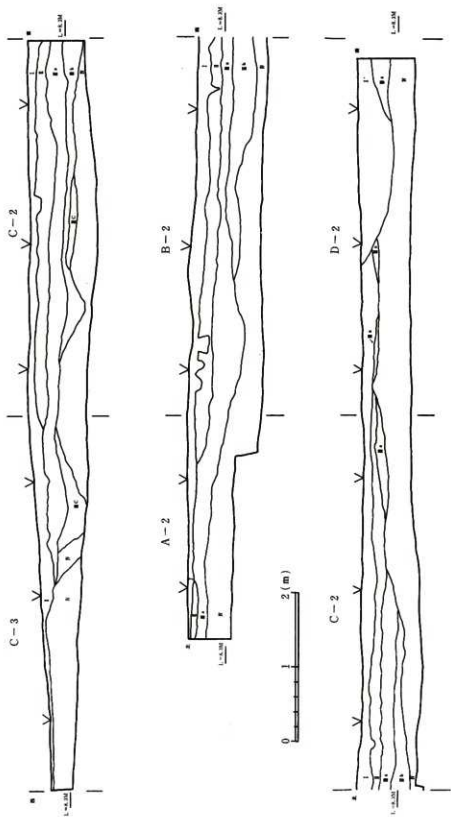
万屋下山田遺跡は笠利町東海岸にある。

遺跡は海岸から約300m程の内陸部にあり、洪積世台地上に形成された古砂丘上に形成されている。砂丘形成時において地形が複雑に陥入しており、遺跡は独立した地形になっている。

当遺跡東側には新砂丘上に形成されている永田遺跡、北側には万屋遺跡、南側にはケジ遺跡等が立地しており、この周辺の砂丘は小規模な遺跡が多く立地している。



第26図 下山田遺跡地形図



第27圖 下山田遺跡土層断面図

遺跡は調査年度と調査主体のちがいで三区画に分けられて調査が行われたが、今回の調査対象は道路拡張に伴って行われた残りの部分(遺跡南端部分)にあたる。砂丘は昭和初期まで畑地として利用されていたが、発掘前はソテツと雑木に覆われていた。独立した砂丘の西側は湿地帯になっており、砂丘と湿地の間には小さな小川が流れており、砂丘を分断している。さらに北側も湿地帯になっており湿地北側にも小川が流れている。全体的に山手から延びた尾根状の台地の上に古砂丘が覆う形になり、その南北は小川で分断された舌状台地であったことがうかがえる。

## 第2節 層 序

場所により、削平を受けるなどして若干異なるが、おおよその層序は下記のとおりである。

I層……表土(攪乱)。

II層……黒色砂。部分的に残る。下部に遺物が若干出土する。

III a層……褐色砂。遺物包含層。

III b層……黒褐色砂。遺物包含層。

III c層……赤褐色砂。c-3区のみに見られ、他には見られない。

IV層……黄白色砂。シロスナ層の上部。

V層……白色砂。シロスナ層。

遺物はIII a層及びIII b層に見られ、一部II層下部にも見られる。遺物は面縄前庭式がほとんどで、縄文時代後期を中心とした時代と考えられる。

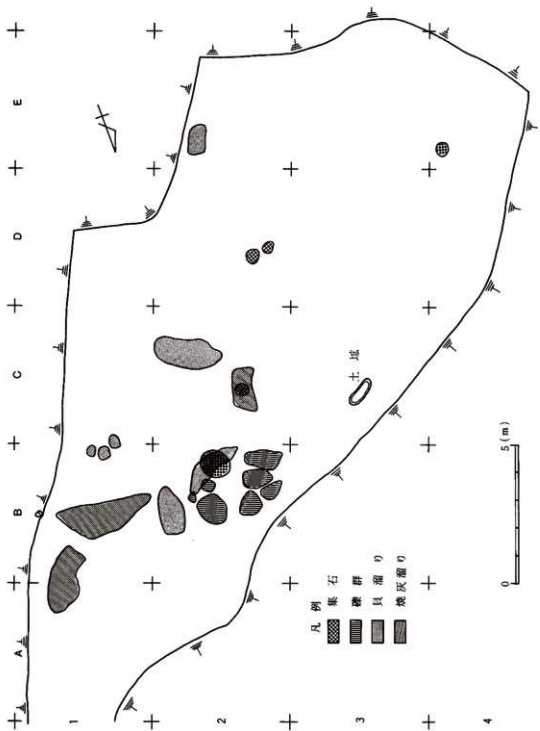
本台地のほぼ中央部が残存が良く、北側及び南側・西側の削平が著しい。

## 第3節 概 要

昭和59年度に調査された本遺跡の東側(道路側)及び既に削平されていた北側を除いた南西部を、東及び北側から表土を削いでいき、南側の畑の段までの遺物包含層を検出し、西側については削平によりシロスナ層(IV層)が出ている面を追いかけて包含層が残っている部分を明らかにして調査対象を確定した。昭和59年度調査時の杭が残っていたため、それをもとにして5mのグリッドを組み、東側から1、2…、北側からA、B、…として、B-2区のように呼称することにした。

表土を削いだ段階でA-1区からD-4区にかけて帯状にII層が延びていたため遺構の可能性も考えて調査を進めた結果、人為的なものではなく、自然地形(旧小谷状)であると判明した。層位的に掘り下げを行い、残存したII層を手初めにして、以下III a、III b層と掘り下げ、無遺物層であるIV層以下のシロスナ層までを確認し、下層の確認として十字形に深掘りを行ったが、遺物は検出できなかった。

III層から確認された遺構として、集石5(規模大1、小4)、礫群1、貝溜り5(規模大3、小2)、土壇1、焼灰溜り3があり、遺物としては面縄前庭式土器のほか、磨製石斧、磨石、敲石、凹石、石皿、スクレイパー、石核などの石器、貝等が出土した。



第28図 下山田遺跡構配置圖

## 第4節 縄文時代

### (1) 遺構

#### ◦集石

南島における集石の例が増えている近年、縄文から弥生にかけての調理法なども注目される場所である。本遺跡からは人頭大の石が周辺に置かれており、中からは拳大ほどの石が積まれてあった。石はほとんどが焼けており、取り上げるとくずれるものもある。砂岩・チャートなどが目立つ。集石の中からは炭化物などの検出はなく、土器片が数点入っているのみである。周辺には貝殻の散乱があり、集石との関連が注目されるが、まとまった出土状況ではない。おそらく、サウチ・下山田Ⅱ遺跡などで発見されたものと同じ性格のものと思われる。面縄前庭式土器が出土したことから、その時代のものといえる。



第29図 集石遺構

#### ◦その他の集石

D-2区に53cm×47cmと、47cm×36cmの2基、C-2区に54cm×43cmの1基、E-4区に52cm×45cmの1基の計4基が確認されたが、明確な掘り込みを持たず、焼土も見られない。

#### ◦礫群

B-2区の1か所に見られたが、散在した礫が7か所に小さくまとまっている。同区に見られた大規模の集石の北側にあり、焼けている印象はなかった。

#### ◦土 壇

C-3区に検出された長径114cm×短径40cmの楕円形で、中央部の深さは21cmを測る。Ⅳ層に掘り込まれ、Ⅲ層を埋土とするが、焼けた形跡や人骨等は見られなかった。性格不明である。

#### ◦貝溜り

規模の大きいものがB-2区、C-2区、E-2区に、小さなものがB・C-1区に検出された。巻貝を中心として貝が集中しており、ほとんどは焼けていなかった。

#### ◦焼灰溜り

A・B-1区と、C-2区の集石の下に見られ、焼けた灰（焼土をほとんど含まない）の中に、巻貝を中心として焼けた貝が割合多量に出土した。

## (2) 土器

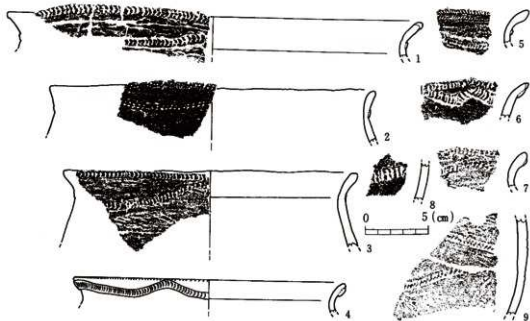
土器は表採資料、発掘資料ともほとんど面縄前庭式土器としてとらえられる土器片である。

面縄前庭式土器については沖永良部神野貝塚の発掘資料で分類が試みられているが、ここの分類は型式名をつけずに文様形態と器形とで分類を進めて行きたい。その中で奄美各地から出土している面縄前庭式土器と沖縄から出土している面縄前庭式とを比較し、面縄前庭式土器研究に対するひとつの資料としたい。

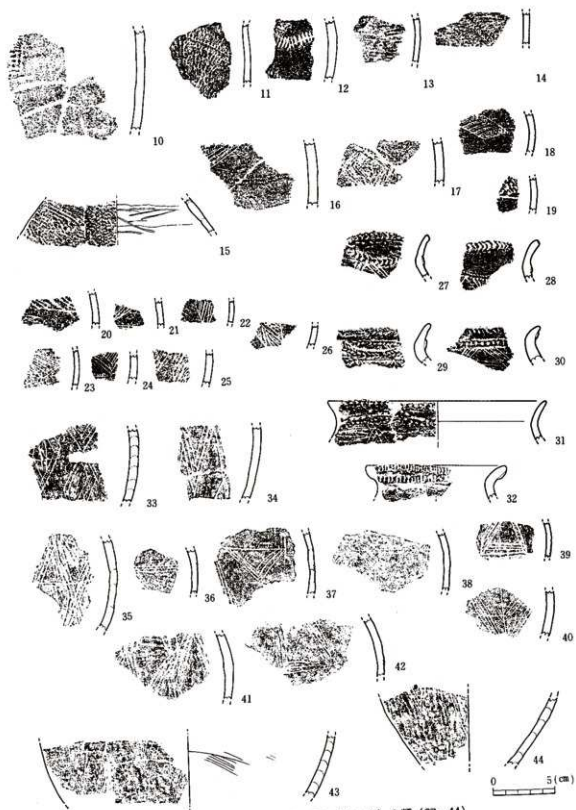
面縄前庭式土器として取り扱う資料には基本的に器形は口縁部が外反し、胴部がややふくらみ、底部が尖底あるいは丸底になっている壺形土器である。文様構成は口縁部、口唇部に貼り付け凸帯文や半載竹管による連点文、沈線による文様構成である。この中で器形や胎土は面縄前庭式土器であるが無文の資料が出土している。これは無文化した面縄前庭式土器としてとらえた。その結果、分類化することが出来た。ただしこの分類で文様の変化や編年を行うには資料が乏しく行うことは出来なかった。分類化を行ったが全体的に時期的には同時期と思われる。

### I類土器 第30図(1~9) 第31図(10~12)

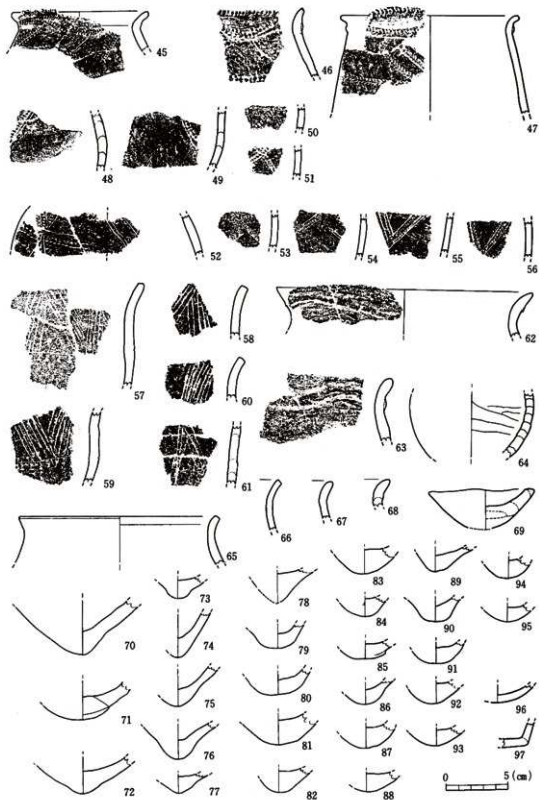
口唇部に半載竹管文を有し、貼り付け凸帯文を頸部に波状にめぐらす。凸部部分にはさらに、半載竹管文が刻まれている。胴部にはヘラ状半載竹管で不規則な文様が刻まれている。胴部は沈線による文様構成は見られない。比較的厚手の土器で混入物が多くザラザラした胎土である。地文は内外とも条痕あるいはハケ目痕を有する。



第30図 I類土器



第31圖 1類 (10~12) 2類 (13~26) 3類 (27~44)



第32図IV類 (45~56) V類 (57~61) VI類 (62・63) ほか



器形は比較的大きい。口縁部の径が26センチと面縄前庭式土器にしては大形の部類であろう。頸部には輪痕もはっきり残っているのもあり、有孔もある。

## Ⅰ類土器

Ⅰ類土器としたものには文様構成が小さな半載竹管文による連点文と沈線で文様が区画化されているものを取り上げた。この中でさらに施文具、施文方法の違いから a, b, c, d と分類を行った。口縁部ははっきりしないが、Ⅰ類土器と共通するものと思われる。

### a タイプ土器 第31図 (15)

a タイプとしたものは小さな半載竹管により二又連点文で文様を構成する。二又連点文は頸部から胴部にかけて施文され、二条を斜行に刻している。全体の文様構成からヒシ形状の文様になると思われる。地文に内外とも条痕があり、外面はていねいに器面調整されているが、内面は雑である。色調は黒褐色で、胎土は石英、砂粒子を多く含み、焼成はやや良し。

### b タイプ土器 第31図 (16・17)

b タイプ土器としたものには文様構成だけによる分類を行った。このタイプはⅠ類土器と胎土、色調などが類似しており、Ⅰ類土器との接合も可能かも知れない。ここでは接合不可のため一応分類を行った。

このタイプは半載竹管文と沈線文により区画された文様帯を有する。胴部附近に数条の沈線でヒシ形を構成し、そのヒシ形の中に半載竹管による二又連点文を刻している。このヒシ形文と一条の二又連点文がめぐらされているのもあり、ヒシ形文を有しないのがⅠ類土器になる。

### c タイプ土器 第31図 (18・19)

c タイプ土器としたものには沈線で方形、もしくはヒシ形を区画し、その中に二又連点文を刻している。全体的な文様構成は不明である。沈線の区画内に刻されている二又連点文は小さな半載竹管(二又間約3mm~4mm)を利用したのと大きな半載竹管(二又間約6mm~7mm)を使用したのがある。内外とも器面調整が行われている。

### d タイプ土器 第31図 (20~26)

d タイプ土器は沈線だけで弓形、またはヒシ形文を構成する。c タイプの二又連点文に対し沈線を用いている違いである。全体の文様構成は不明である。色調赤褐色で胎土は石英を多く混入している砂質土器である。c タイプ土器も一条の半載竹管文をめぐらすものもある。

## Ⅱ類土器

Ⅱ類土器はこれまで面縄前庭式土器として扱われていた代表的な土器である。このⅡ類土器も文様構成から数タイプに分類出来るようであるが、全体的な文様構成がはっきりしないため沈線だけで文様を構成しているものを総括してⅡ類土器とした。口縁部は外反し、口唇部あるいは頸部に貼り付け凸帯文を波状にめぐらしている。半載竹管文による文様は口唇部分を貼り付け凸帯部分に刻されている。凸帯文下から頸部にかけては斜行沈線を数条有し、鋸歯状あるいは三角文を構成する。口縁の文様帯はほとんど一緒であるが、鋸歯状の文様帯下から底部近くまで数条の沈線でスダレ状に文様を構成する土器、この土器が今まで面縄前庭式土器として扱

われていた土器である。本遺跡からの出土量は少ない。

第31図35の土器は数条の沈線でタテにヒシ形文を連続して刻している。おそらく器面全体に及ぶと思われるが、ヒシ形文だけで構成されるかは不明であり、この文様に三角文も加わる可能性もあると思われる。色調は赤褐色、内外とも器面調整され、条痕を有する。石英を含み、焼成は良好。4～5mmと比較的薄手の土器である。写真Ⅲ類の土器は頸部から底部近くまでの土器片である。比較的小型の壺形土器である。頸部から3本の沈線でタテ長のヒシ形文を底部近くまで刻し、この文様を器面全体にめぐらしていると思われる。器面内外とも地文は条痕で内面は条痕の残りが良い。焼成はやや良し。第31図37・38のように頸部から底部近くまでタテ長のヒシ形文と三角文を交互に器面全体にめぐらしている。沈線による文様の組み合わせはバラエティーになっている。しかしこの文様は決して区画され整理された文様でなく、大小様々である。本当に全体が接合出来ない限り、どのような文様構成になっているのか不明な部分が多い。これはⅢ類土器全体に共通して言えることである。第31図40土器のようにタテに一本の沈線を引いてこの沈線を軸に相対的に数条の斜行沈線で文様帯をなすものもある。

#### Ⅳ類土器 第32図

Ⅳ類土器は沈線と二又連点文による組み合わせで文様を構成するものを上げた。その中で沈線を引いてその上に二又連点文を刻するものと二又連点文を沈線で囲う2タイプに分類を行った。

##### aタイプ、第32図(45～51)

aタイプは口縁部に波状の貼り付け凸帯文を有し、その直下から沈線による三角文をめぐらす。その沈線に半載竹管による連点文を刻している。胴部にも同様な技法で文様があるが、どのような文様構成かは不明である。第32図45も同様な技法である。頸部に入る文様帯は基本的に三角文をめぐらしている。

##### bタイプ、第32図(52～56)

bタイプは二又連点文を沈線で囲い文様を構成している。全体の文様構成は土器片が小片のため不明であるが、55に見られるように三角文を主として構成されると思われる。

Ⅳ類は量的にも47点しかなく少ない。

#### Ⅴ類土器、第32図(57～61)

口縁部がゆるやかに外反する土器である。文様帯は口縁部から頸部にかけて有する。口唇部は平たく、丸みをおびてない。5、6本斜行沈線で鋸歯状にめぐらす。文様直下はヨコに一条の沈線をめぐらし、さらにその下に半載竹管による二又連点文めぐらすのが特徴である。器形からみると面縄前庭式土器とは違うが施工具、文様などからⅤ類にした。器形は無文土器に類似する。

#### 無文土器、第32図(65～68)

Ⅴ類土器と器形は同じで文様を有しない土器である。Ⅴ類土器が無文化したタイプとも思われるが資料が少ないため今後の研究課題にしたい。口縁部ばかり4点の出土である。胴部は不明である。

#### Ⅵ類土器, 第32図 (62・63)

口縁部は外反し、貼り付け凸帯文を波状に一条めぐらす。器形は面縄前庭式土器であるが貼り付け凸帯文や器面は無文である。Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ類土器などから沈線を消したものがⅥ類になっている。この土器も前庭式土器の無文化を思わせる土器である。

#### 完形土器, 第32図 (69)

丸底の土器で輪積による技法である。粘土ヒモを巻き上げ、口縁部で切れている。土器製作途中で終了したような土器である。完成品とは思えない土器である。

#### 曾畑系土器, 第33図 (98~108)

曾畑系土器が9点出土している。内外

とも地文は条痕を有しており、これまでの曾畑系土器と類似する。口縁部はほぼ直口で、色調は赤褐色、焼成は良い。胎土は砂粒子を多少含んでいる。曾畑系土器と面縄前庭式土器は宇宙高又遺跡でも出土しており、比較的時期的にも近いと思われる。

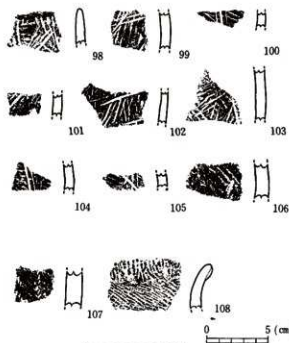
#### その他の土器, 第33図 (107・108)

107は器面内外とも地文は条痕を有し、表に文様がある。文様は貝ガラによる施文と思われるがはっきりしない。胎土は石英を多く含み、焼成は悪い。比較的厚手の土器である。

108は口縁部で土器の内外とも荒い条痕を残す。口唇部は貼り付け凸帯文であり、半載竹管による施文である。面縄前庭式土器とも類似するが、条痕が荒く、単ペラによる施文である。器形も口縁部がゆるく外反するにとどまるため、一応その他の土器に加えた。1点の出土である。

土器は以上のように分類を行ったが、この分類はまだ沖縄との比較を完全に行っていない。同一遺跡からのものだけとなっている。分類を行ったひとつには施文の違いをいくつかあげたが、面縄前庭式土器に使用されている文様の施文はヘラ、半載竹管の大、小、先の尖ったエンピツ状の物などが上げられる。施文方法は半載竹管を押し引き状にし、二又連点文をなす。貼り付け凸帯文の上に半載竹管で押し引きするなどの比較的単純な施文と施文方法である。

第32図, 70~97は底部であるが、底部にも粘土ヒモを巻き上げて作る方法(79・80・91)がはっきり残る資料もあった。95と96は面縄前庭式土器の底部とは違うタイプの土器である。前庭式土器タイプの土器とした底部の中には曾畑系土器の底部も含まれていると思われるが判明は出来なかった。底部も乳房状尖底と尖底、丸底等に分けられるが、全体を復元出来る資料がなかったため、どのタイプの土器のものかは不明である。

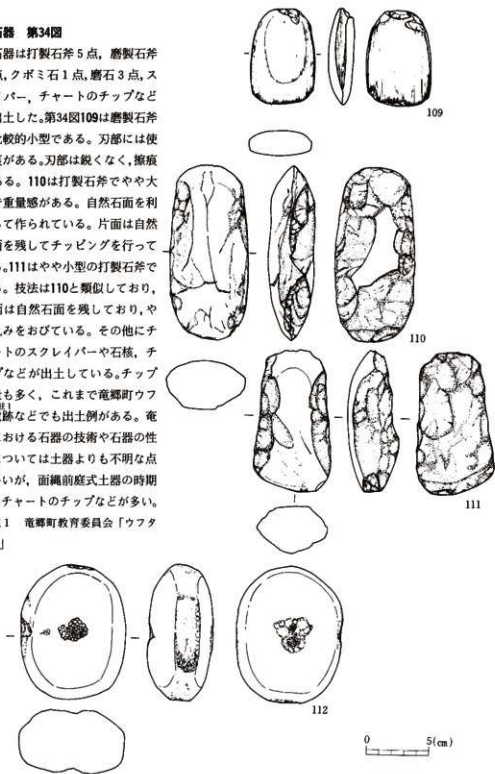


第33図 曾畑系土器

石器 第34図

石器は打製石斧5点、磨製石斧3点、クボミ石1点、磨石3点、スレイパー、チャートのチップなどが出土した。第34図109は磨製石斧で比較的小型である。刃部には使用痕がある。刃部は鋭くなく、擦痕である。110は打製石斧でやや大型で重量感がある。自然石面を利用して作られている。片面は自然石面を残してチップングを行っている。111はやや小型の打製石斧である。技法は110と類似しており、片面は自然石面を残しており、やや丸みをおびている。その他にチャートのスクレイパーや石核、チップなどが出土している。チップは量も多く、これまで竜郷町ウフタ遺跡<sup>註1</sup>などでも出土例がある。奄美における石器の技術や石器の性格については土器よりも不明な点が多いが、面縄前庭式土器の時期にはチャートのチップなどが多い。

註1 竜郷町教育委員会「ウフタ遺跡」



第34図 石器

## 第5節 小 結

下山田遺跡は年次的に開発される部分から発掘調査が行われており、ケジ遺跡同様に下山田Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは同じ砂丘上に立地する遺跡である。今回調査を行った部分は昨年度昭和59年に新奄美空港に伴う道路拡張工事からはずれた遺跡の西側部分にあたる。砂丘全体は南北に長く、東西には新砂丘がいくつも重なり合って海辺まで続いている。遺跡西側と南側は小川で砂丘が分断された形になっている。出土物もかたよがりが見られ、砂丘全体には及んでいない。笠利町東海岸の砂丘遺跡の立地条件である<sup>註1</sup>。下山田遺跡が面縄前庭式土器と曾畑系土器が表採された場所は遺跡の北側にあたる。昭和59年に県文化課が行った発掘調査は遺跡の東側にあたり、古砂丘と新砂丘の重なり合っている状況であった<sup>註2</sup>。その時点では面縄前庭式土器の出土量は少なく宇宙下層式土器を主としていたと思われる。これは後日報告書が出されるのでここでは記録メモにしたい。今回調査を行った南側部分は面縄前庭式土器を中心とする遺物である。北東から南西に向けて溝状のゆるい落ち込みがあり、その周辺に遺物が集中している。比較的小規模なグループの生活と考えられる。これらは竜郷町ウフタ遺跡<sup>註3</sup>にも見られ、下山田遺跡北側にも見られる。

面縄前庭式土器と共存する土器としては、曾畑系土器や条痕土器などが知られているが、量的には少ない。また現在のところ宇宙下層式土器のグループに面縄前庭式土器の影響があると思われる土器はなく、面縄前庭式土器は独自の文化で生活を行っていたグループとも考えられる。

今回は面縄前庭式土器と呼ばれるもの、またはその範疇に入るものとして沖永良部神野貝塚出土の遺物を意識して分類を行った。沖縄にも面縄前庭式土器の新しい資料が発見され、現在整理作業が行われている<sup>註4</sup>。これらの資料が報告された場合、分類にも遺物のとらえ方にも共通点があり、理解出来る部分と理解出来ない部分が出て来るのは必至であろう。今後の面縄前庭式土器研究が楽しみである。

尚この分類は一応感的な分類がだいぶ入っており、決してⅠ類が古くⅢ類が新しいとは限らない。復元資料が少ないため全体の文様構成がつかめなかったことは事実であり、今後の資料増加によってはⅠ類とⅢ類が復元出来る可能性もありうる。

註1 中山清美「砂丘性小遺跡について」『ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留産遺跡』笠利町教育委員会。

註2 発掘調査期間中に見学

註3 竜郷町教育委員会「ウフタ遺跡」 1982年

註4 沖縄国際大学考古学研究室「沖永良部神野貝塚」 1985年

註5 沖縄県文化課岸元義彦、島 両氏と北谷町教育委員会中村恵氏に案内され、資料を見学することが出来た。

## 貝類の食用

郷土料理研究家

久留ひろみ

奄美の各集落はほとんど海に面したところにあり、海とのつながりは深い。奄美の人たちは海の幸を恵んでもらい、古代から現代に生きている。

現在は自然食ブームとも言われ、特に郷土料理が見直されてきています。私たちが料理として食べている貝は、古代人たちも豊富に食べていたことが、貝塚や遺跡の発掘調査で明らかになっています。

現在、特に珍味とされ、愛食されているのにトビンニヤ（まがきがい）とヤコグ（夜光貝）があります。今回、発掘調査現場を見学させていただき、その出土量にも驚きました。

トビンニヤの現在の調理法は次の通りです。

貝をゆでて身を取り出し、砂を洗い落とします。身の取り出しもツメを引っ張ると簡単に取れます。そして、ニラと身を炒めます。塩・しょう油で味付けします。それとも、そのまま塩ゆでしても、おいしくいただけます。

ヤコグの調理方法は、次の通りです。

まず、中身を取り出しますが、それは慣れた方でないとできません。もし中身が取り出せない方は、そのまま貝ごと水をたっぷりナベの中に入れて煮ても結構です。塩を少し入れて30分程煮ます。それから表面を少しこげる程度に焼いて味噌に漬け込み、2～3日して食べます。最近では、サシミにして食べることも多いようです。

現在では以上のような食べ方が一般的ですが、今後は貝のカロリーと古代人たちの食用方法なども調査できたら、と思います。その他、シャコ貝・ホラ貝などもたくさんあり、興味を持ちました。

調理方法にはどのようなものがあつたか、などについても、今後の遺跡とのつながりからも興味をひくところですが。古代人たちのキッチン跡とも思われる集石についても興味をおぼえました。

調査現場を見学させていただいた上に、貴重な時間を何日もおじゃまし、いろいろと御指導下さった繁昌さん、中山さんにはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

（編集註）上記の手記は、下山田遺跡の調査時に貝溜りの検出や取り上げに協力をいただいた久留さんに、無理をお願いして書いていただいたもので、貝の食用の好資料でしょう。

# ケジⅢ遺跡





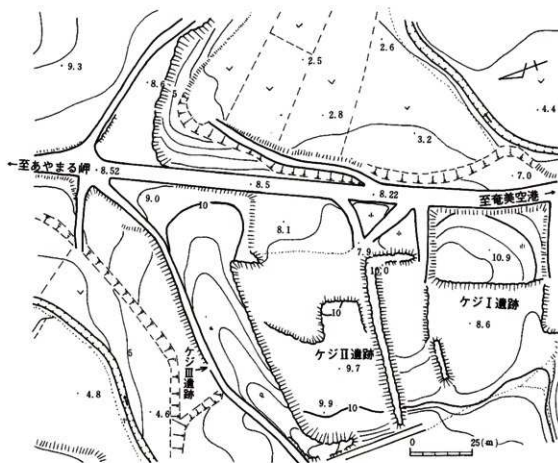
## 第5章 ケジⅢ遺跡

### 第1節 位置

ケジ遺跡は、笠利半島東海岸にあり、大島郡笠利町大字万屋字ケジに位置する。

ケジ遺跡は現在ケジⅠ、Ⅱ、Ⅲと区別されているが、もともとひとつの砂丘であり、その所有所が個々に砂を売ったため現存した形がⅠ、Ⅱ、Ⅲと独立した形となっている。ケジ遺跡をここでは調査区ごとに南側からケジⅠ、Ⅱ、Ⅲと区別して記述したい。

遺跡は海岸から約300m程の内陸部にあり、定山(175m)と大刈山( )から東に伸びた舌状の洪積台地の末端部に形成された古砂丘上にある。ケジⅢ遺跡部分は遺跡の砂丘北端部に位置し、後方(東側)と南側(ケジⅡ)が削り取られ、北側は崖になっており、さらに前方(海側)も砂取りが行われている。わずかその部分を残すだけとなっている。今回の調査はそれにさらに追い打ちをかけるように新奄美空港に伴う開発でわずかに残った遺跡の半分が県事業で行われることになり、残る部分は町創で対応するに至った。せめて、遺跡の広がりや性格をつかめればとの願いを込めて調査を行った。

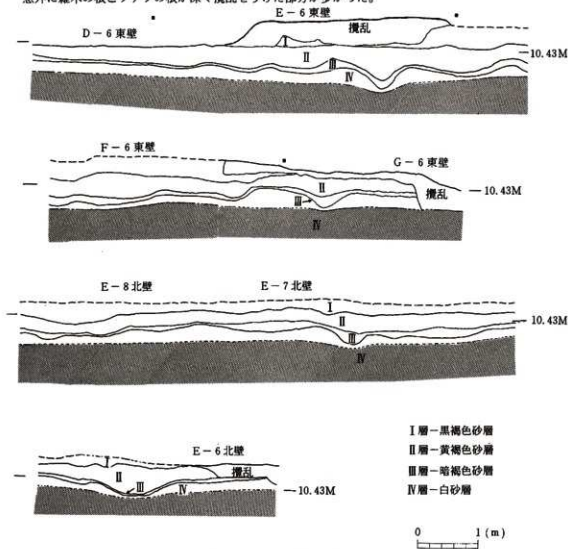


第35図 ケジⅢ遺跡地形図

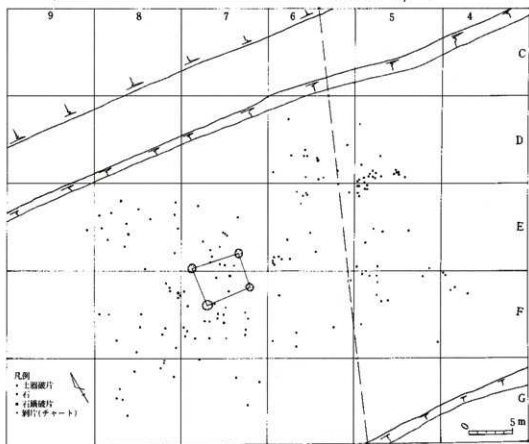
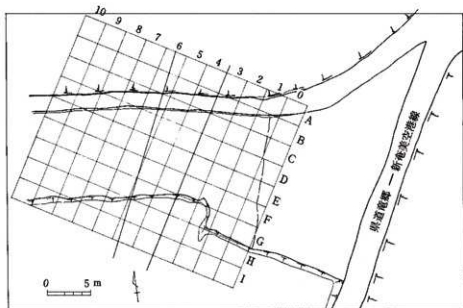
## 第2節 層 序

基本的には表層が雑木やソテツの根により攪乱されており、白砂層の下に遺物包含層がある単純層である。第1層は攪乱層で出土遺物も類須恵器の小片、曾畑系土器片などが出土する。第2層は白砂層で無遺物層である。ただし、滑石製の石ナベ片などが二点出土しており、ピットもこの層からの掘り込みと思われる。木の根やソテツの根が深く確認することは出来なかった。

第3層、第4層が遺物包含層であるが、3層と4層は色調の違いから分けた。第3層は黒褐色砂層で炭化物も若干含む。出土遺物は比較的小片が多い。第4層は黄褐色砂層になっており、部分的に濃い所もある。この層は全体的にはっきりした広がりはない。遺物はやや大型の曾畑系土器を出土する。地山と思われる白砂層は自然埋積のいたずらか凹凸状の波だったか所が見られた。全体的に砂丘の移動あるいは層序の逆転と思われる埋積状況は見られなかった。ただ意外に雑木の根とソテツの根が深く攪乱をうけた部分が多かった。



第36図 ケジⅢ遺跡土層図



第37図 ケジⅢ遺跡グリッド配置図及び遺物出土状況

### 第3節 出土遺物

#### 土器 (第38・39図)

土器は表面にやや太い沈線で文様を構成する厚手の土器が主体である。地表面と攪乱部分からは平底の底部などが出土した。遺物包含層から出土した土器の器形は、ほとんど深鉢形と思われ、その文様と器形の相違によってⅠ類からⅣ類に大別できる。

Ⅰ類 (1～10) 外器面に太い沈線で文様を施したもので、厚手の土器である。胎土は石英粒を多量に含み、焼成はあまり良くない。色調は赤褐色である。曾畑系土器であるが、昭和57年度に熊大が調査したケジⅠ遺跡<sup>註1</sup>の調査では出土していない。5は口縁部で、口唇部に刻目が施され、口縁部には3条の連点文がめぐらされ、その下から斜行沈線になっている。内面は口縁部分に幾何学文が施されている。

Ⅱ類 (11～20) 外器面は細い沈線がタテ方向に施され、タテの沈線下をヨコに2条の沈線がめぐらされている (12)。Ⅰ類にくらべ沈線が細く、胎土は石英が少なく、角閃石が混入している。焼成は良い。Ⅱ類は内面全体に整形時の条痕を残す。

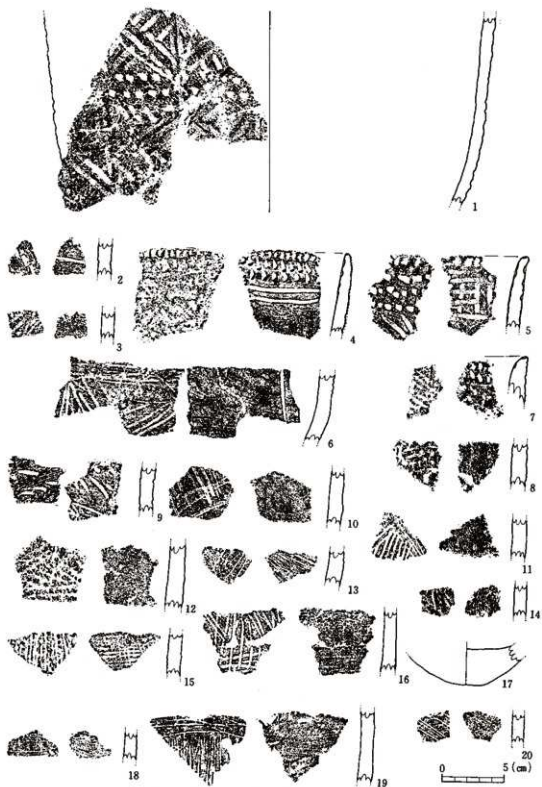
Ⅲ類 (21・22・24・25) Ⅰ・Ⅱ類にくらべ比較的薄手の土器である。口唇部直下にタテ方向に施文した連点文が1条めぐらされている (21)。器面の文様は浅い沈線で、繊維状のものを施文具に利用したと思われる。胎土は石英を多少混入している。焼成は良好。

Ⅳ類 (23・26～29) 外器面は無文で、地文に条痕が多少観察できる。内器面は貝殻条痕を有する。Ⅰ・Ⅱ類と同様に厚手の土器であるが、石英と長石粒を含んでいる。焼成はやや良い。色調は外器面が黄褐色で、内器面が黒褐色になっている。

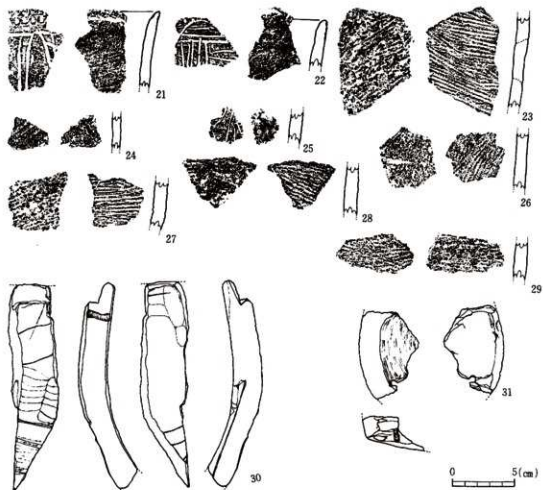
底部 (17) 内面はきれいにナデられており、器形は丸底で輪積技法である。

以上が本遺跡の主流をなす土器で、昭和57年調査のケジⅠ遺跡から出土したようなものはほとんど入っていない。その報告書の中では、Ⅰ～Ⅴ類に分類がされているが、Ⅴ類に分類されている土器<sup>註2</sup>が本遺跡のⅡ類に類似する以外は、全く別のタイプの土器である。

註1・2 笠利町教育委員会 笠利町文化財報告No 6『ケジ・コピロ・辺留窪遺跡』1983年3月



第38圖 遺物(1) 1類土器(1-14) 2類土器(15-20)



第39図 遺物(2) 3類土器(21, 22, 24) 4類土器(23, 25~29) 滑石30, 31

### 石器(第37図・30・31)

ケジⅢ遺跡からは滑石製の石ナベ片が二点出土している。滑石の出土例は瀬戸内町嘉徳集落<sup>註1</sup>喜界町アギからそれぞれ破片で出土している。その他喜界町では完形品もあると話を聞いているがまだ実見していない。滑石と布目丘痕文土器は同時期と考えられ、竜郷町手広遺跡からも出土例がある<sup>註3</sup>。

滑石の大きさは長さが約16センチで底部から口縁部にかけての破片と思われる。口縁部は外面が段状になり断面が薄くなっている。

チャートのチップはケジⅡや下山田でも出土しており、曾畑系土器に伴う石器と思われる。チャートは奄美で入手出来る石で、石材として良く利用されている。

註1 嘉徳集落にて表採

註2 喜界町英啓次郎氏表採資料

註3 竜郷町教育委員会・奄美考古学会【手広遺跡】 年

#### 第4節 小 結

ケジ遺跡は前回の調査でも遺物のかたよりが見られ、特に昭和57年の調査時には出土遺物の量はきわめて少なかった。これは発掘調査を行ったトレンチに遺物の集中しているか所がはずれてしまったためである。広がりにしてわずか20m程の砂丘においてもこのような例は良くある。全面発掘調査を行った長浜金久遺跡<sup>註3</sup>でその全貌を見ることが出来た。このことは時期的に砂丘上に生活期間を求める小集団の生活が行われていたと考えられる。ケジ遺跡全体で見るとケジ砂丘地にまばらに入っているグループとある程度のまとまりを持って入っているグループに分けられよう。前者が曾烟系土器、条痕土器で砂丘地全体にまばらに入っており、後者が松山式土器、面縄前庭式土器で貝だまりや集石遺構を持ち、小集団的なまとまりで入って来ている。これはまだこの時期の発掘例が少ないためその解明には資料の増加が待たれるところである。

ケジⅢ遺跡は上述の視点からとらえた場合は、砂丘全体にまばらな広がりを持つ曾烟系土器から条痕土器の時代にあたる。この時期の遺構として検出されたのは、焼砂部分と用途不明のピットがある。ピットに関しては住居跡かと思われたが、砂丘のためその掘り込み部分は不明である。また南島でよく見られる集石と石囲いはなく、遺物の出土状況からも砂丘全体にまばらに広がっている状況であることから住居跡としての可能性は少ないと思われる。土器片全体を見ても小片で多少ローリングを受けている。焼砂部分もかなり長時間にわたって利用された状況ではなく、数回利用された程度である。焼砂部分の炭火物の量も少なく、焼けた広がりもはっきりしないが、あきらかに火の使用を行っていたことはうかがえる。

ケジ遺跡のようにひとつの砂丘が三つに分断され、辛うじて残った遺物包含層も樹根やソテツの根によりかなりの攪乱を受けていた。その中でケジⅢ部分まで曾烟系土器や条痕土器が広がっていたことは意義深い。昭和57年の調査で松山式土器と面縄前庭式土器<sup>註4</sup>が共伴され、この時期から集石や土壇が発見されている。このような例は竜郷町ウフタ遺跡<sup>註5</sup>、沖縄県具志川島遺跡群にも出土例がある。集石や土壇からはまとまった貝が出土する例があり、この時期には貝だまりもいくつか持つことがある。しかし今回のケジⅢ遺跡においては貝の量はきわめて少なく、はっきりした出土状況ではなかった。ケジ遺跡周辺を調査した結果においても小規模遺跡が多くその若干の知見を得ている。

今回の発掘調査でさらに新しい資料をひとつ増やしたことになる。

註 1 昭和59年新空港建設に伴う県事業の発掘調査を見学

註2・4 笠利町教育委員会『ケジ遺跡、コピロ遺跡、辺留窪遺跡』笠利町文化財報告第6集 1983年

註 3 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡』1985年

註 5 竜郷町教育委員会『ウフタ遺跡』1982年

註 6 長浜金久遺跡の発見時とケジ遺跡、下山田遺跡で確認

註4・7 中山清美『砂丘性小遺跡について』『ケジ遺跡、コピロ遺跡、辺留窪遺跡』笠利町教育委員会 1983年

## 第6章 ま と め

遺跡の内容については、小結で一応の締めくくりを行ったので、ここでは各遺跡についての問題点などを挙げて、今後の調査・研究による解明を期待することにする。

### ○ <sup>グスク</sup> 城 遺 跡

本遺跡の名称、グスクについては、小結でも述べたように「城」「<sup>註1</sup>聖城」「<sup>註2</sup>集落」などの説があり、確定はしていない。しかし、奄美諸島において行われた中世城館跡調査<sup>註4</sup>では、本土（という呼称が適切かどうかかわからないが）の中世の山城と同様な形態—空堀・土塁など—をもつものや、館に相当すると思われるアジ屋敷と呼ばれるものなどのほかに、伝承のみ残り、平地の集落とだけしか見えないものもあり、また、神社となったり祠が作られたりしたものがあるなど、やはり沖縄と同様に混沌としている。本遺跡が何れであったかについては現況においては明言はできかねるが、九州歴史資料館の亀井明德氏による青・白磁等の観察からは、13世紀前半まで遡るものがあることや、遺物の中心が13世紀であることから、奄美におけるグスクとしては比較的古い方ではないか、との教示を得たことを記すに留めたい。

地層については、本遺跡が砂丘（旧砂丘）上に形成されていることから、砂の移動等が当然考えられ、また、地層（地形）の傾斜等により部分的に削平が行われたり、流出等があった場合に起こる層の比定の困難さが挙げられる。特に、無遺物の砂層は、何れも同じ黄白色をしており、その上下関係が不明確な場合がある。その際に、同型式の土器等が出土するなら問題は無いわけであるが、沖縄・奄美諸島の土器編年が確立していない現段階においては、型式の異なる土器が離れた場所から出土した場合には大きな問題となる要素を含んでいる。本遺跡においては、Ⅳ層とⅥ層の無遺物砂層がまさにそれで、従ってⅢ層とⅤ層に関わって来て、結果的に斜格子沈線文をもつ土器や宇宿上層式土器の問題となる。斜格子沈線文の土器は面縄西洞式とは離れた場所から出土したが、同じⅤ層としても全く同時期なのか、そうでなければ先後関係はどうなるのかが疑問点として残った。また、縄文時代概当の土器として一括して捉えた突帯を有する土器などの一群は何型式（何類）かに分けられようが、やはり同じⅤ層にしても斜格子沈線文の土器と同様な問題が出てくる。宇宿上層式については、砂による遺物の移動が起こったと考えられ、Ⅲ層とⅤ層の両層から出土している。これは、場所によってⅢ層とⅤ層のうち1つの層が欠落しているところもあったため、無遺物層の黄白色砂層がⅣ層に当るのかⅥ層に概当するのかが明確にできなかったことも一因と考えられる。Ⅲ層は兼久式の概当層と思われ、宇宿上層式が同一層から出土したことは、宇宿上層式は兼久式と併行していると考えられることも可能ではあろうが、遺物の散布はⅤ層にも見られることから、何れが本来の層なのか決し難い。その場合でも面縄西洞式よりは新しいことは明らかであり、最終的に縄文時代晩期と捉えるのか、弥生時代に比定するのかについては結論は出せなかったため、今後を期待する。兼久式についても弥生後期末に始まるのか、古墳時代相当からなのかは不明であり、加えて下限についても諸説あり、未だ決着を見ていない。本遺跡に限って言うならば、宇宿上層式との関係及び器形・突帯の様子などから、それほど下るものではないと思われるということである。



## ◎ 下山田遺跡

下山田遺跡は面縄前庭式土器を主とした遺跡で、これまで知られている面縄前庭式土器にさらに新しい資料を加えることになった。沖永良部神野貝塚出土の遺物で面縄前庭式土器が数タイプに分類され、型式設定が試みられるに至っている。その資料に追加するごとく今回の発見になる。面縄前庭式土器に文様のバラエティーが多いこと。器形の変化などが論議される。そうした中さらに沖縄県から新しい資料を追加すべく発見が行われている。これまで面縄前庭式は独自の土器器形と文様から他の土器からの影響を受けず与えずという感が強かった。その中で面縄前庭式土器が数タイプに分類出来たことは今後他の土器との共存関係が目目されることである。竜郷町ウフタ遺跡においてはチャートのスクレイパーと一緒に出土した他チップも多い。ケジ遺跡からは松山式土器と共存して出土。宇宿高又遺跡からは曾烟系土器と一緒に出土しており、今回は石器、曾烟系土器そして器形、文様のバラエティーにとんだ出土状況であり、今後の面縄前庭式土器研究にひとつの大きな資料を追加したことになろう。

## ◎ ケジⅢ遺跡

ケジⅢ遺跡は曾烟系土器を主とした遺跡であるが、遺跡全体に広がっていない。遺跡そのものの保存状況が良くなかったことと遺跡の中心をそれたことであろう。ケジⅠ、Ⅱ、Ⅲとした遺跡の中で全体的な遺跡の性格をつかまえることはむづかしかったと思われる。ケジⅠ遺跡とケジⅡ遺跡との関連、ケジⅢ遺跡とケジⅡ遺跡との広がりなどから、調査が行われた面積よりもむしろ破壊された面積の方が多いのである。ケジⅢ遺跡はそうしたケジ遺跡の北側はずれ部分になっており、遺跡の中心からはずれていると見られる。

出土遺物から見ると曾烟系土器が黄褐色砂層から出土している。黄褐色砂層はケジⅠ遺跡にも一部見られており、下山田遺跡にも一部見られている。三ヶ所から出土している黄褐色砂層が同一層であれば、この時期に曾烟系土器のグループが点々と入って来て、松山、面縄前庭が同様に点々とする。そして宇宿下層式土器グループがほぼ定着した形に入って来たのではと考えられる。曾烟系や面縄前庭式土器の出土状況が宇宿下層式土器グループに比べて比較的小規模であり、遺物の出土量が少ないのはそうした定住地でなくむしろベースキャンプ的な考えは出来ないだろうか。宇宿下層式土器グループになるとかなりの期間定住していたと考えられ集石や焼土などをしたかなりの量の遺物が出土している。ケジⅢ遺跡においては短期間の生活跡と考えられる。

註1 当真嗣一氏はかの説

註2 仲松弥秀氏はかの説

註3 富元政秀氏の説

註4 昭和57年度 鹿児島県教育委員会調査

註5 沖縄国際大学考古学研究室「沖永良部神野貝塚」『島嶼の考古』7号

註6 高宮廣衛「暫定編年（沖縄諸島）の第3次修正」『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科編』第12巻第1号

註7 沖縄国際大学にて新しい資料について勉強会が行われる。

註8 沖縄県文化課岸本・島岡氏によって報告書作成中。

註9 笠利町教育委員会「ウフタ遺跡」1982年

註10 笠利町教育委員会「ケジ・コピロ・辺野壠遺跡」1983年

註11 笠利町教育委員会「宇宿高又遺跡」1978年

昭和59年3月



# 図 版





遺跡遠景 (南東より)



遺跡遠景・城遺跡近景

図版 2

城  
遺  
跡



城遺跡土層断面（南西より）



城遺跡調査風景（西より）

城遺跡土層断面・調査風景



中世の遺構（北より）



ピット 3 検出状況

城遺跡中世の遺構・ピット 3 検出状況

城遺跡



1号人骨検出状況

2号人骨検出状況



城遺跡1号人骨検出状況・2号人骨検出状況



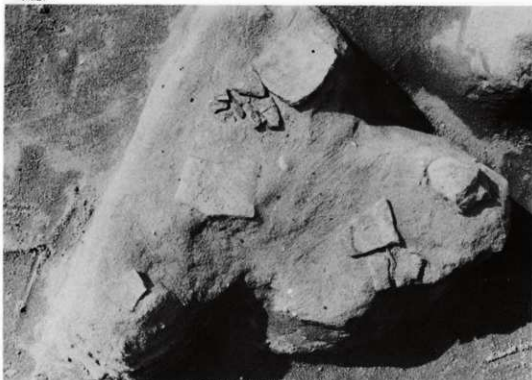


3号人骨検出状況（東より）



遺物出土状況（西より）  
城遺跡 3号人骨検出状況・遺物出土状況

图版 6



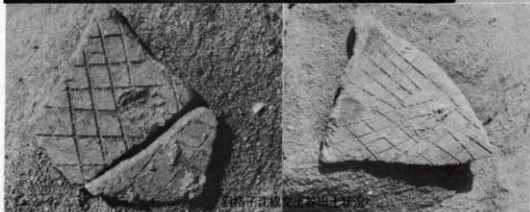
面繩西洞式土器出土狀況



斜格子沈線文土器出土狀況  
城遺跡土器出土狀況



出土状況

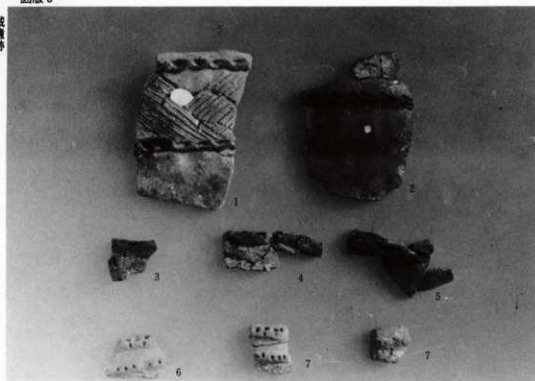


貝子沈殿土器出土状況

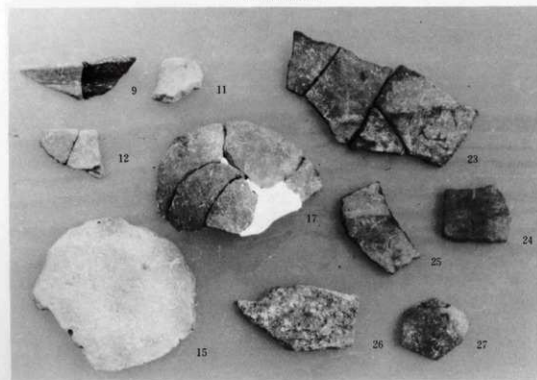


貝溜り検出状況

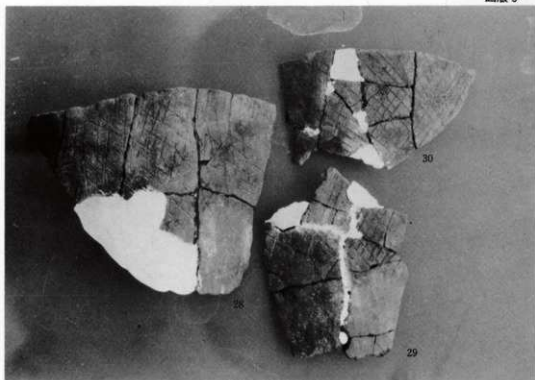
城遺跡土器出土状況・貝溜り検出状況



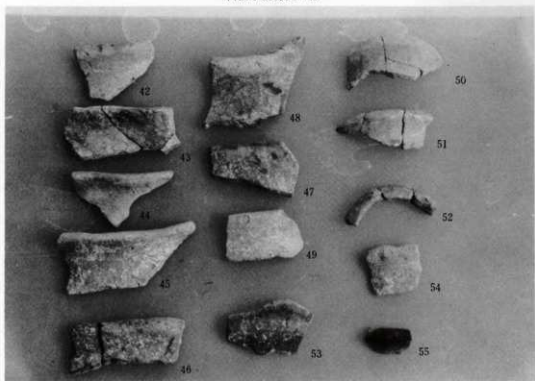
面縄西洞式土器



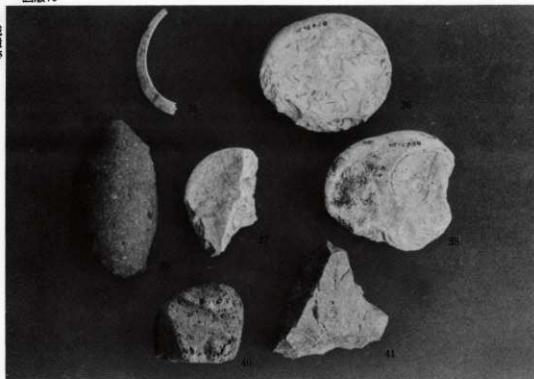
縄文時代相当の土器  
城遺跡 遺物(1)



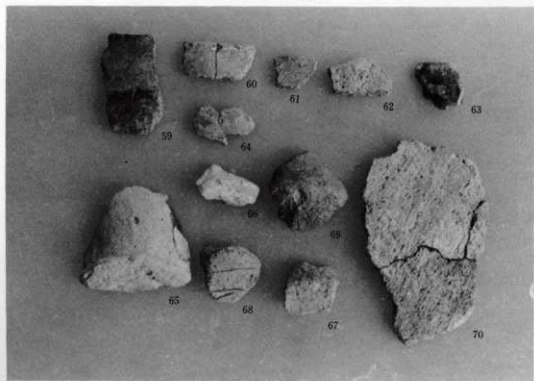
斜格子沈線文土器



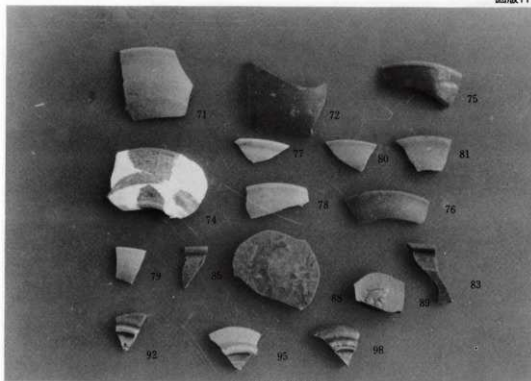
宇宿上層式土器  
城遺跡 遺物(2)



貝輪・螺蓋製貝弁ほか



兼久式土器ほか  
城遺跡 遺物3)

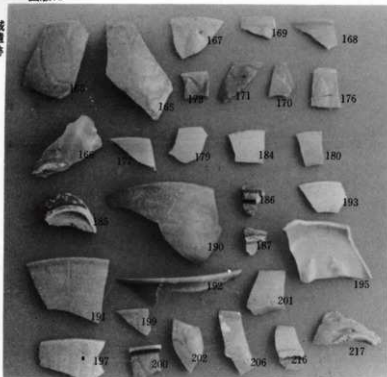


ピット3出土遺物

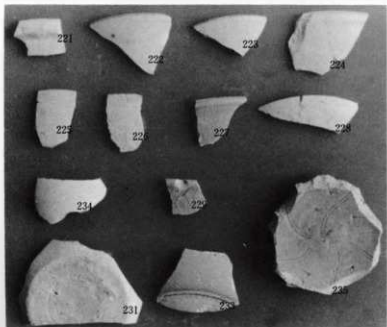


類須恵器（工事中の発見）  
城遺跡 遺物4)

城遺跡



青磁



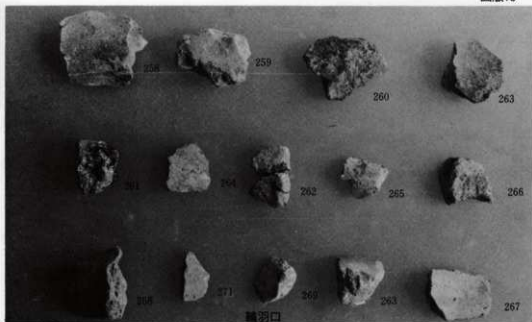
白磁



染付

城遺跡 遺物(5)

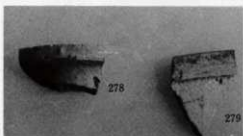




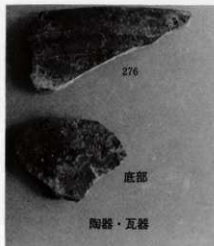
籠羽口



鉄滓



刀子



276

底部

陶器・瓦器



磁器

城遺跡 遺物(6)



下山田遺跡近景（南西より）



下山田遺跡土層断面（北西より）  
下山田遺跡近景・土層断面

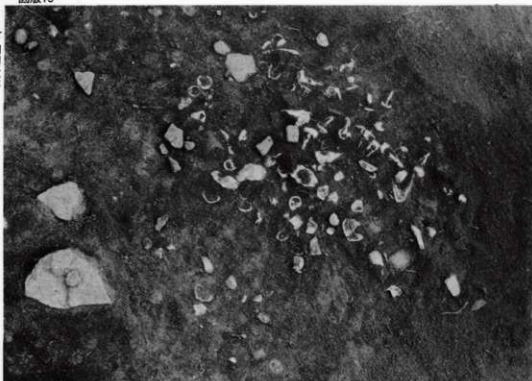


集石検出状況



集石下部の貝溜り検出状況

下山田遺跡集石検出状況・集石下部の貝溜り検出状況



貝溜り検出状況

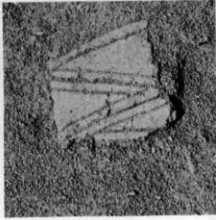


遺物出土状況

下山田遺跡貝溜り検出状況・遺物出土状況

下山田遺跡土器出土状況・石器出土状況

石器出土状況



土器出土状況



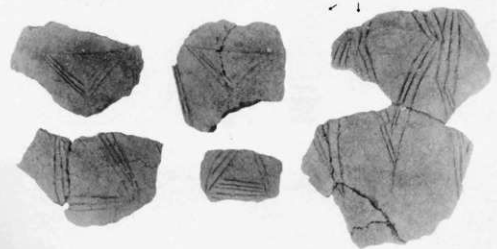
下山田遺跡



I類土器



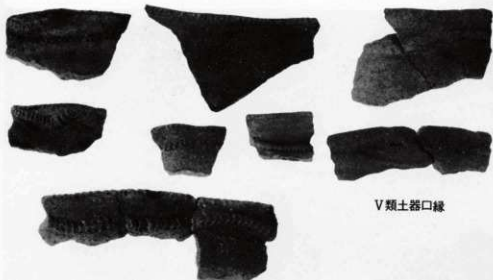
II類土器



III類土器



曾畑系土器



V類土器口縁

I類土器口縁



II類土器口縁



III類土器口縁



完形土器







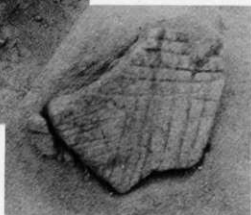


ケジ田遺跡近景



ケジ田遺跡土層断面  
ケジ田遺跡近景・土層断面

ケジⅢ遺跡



↑  
土器出土状況 →



石器出土状況

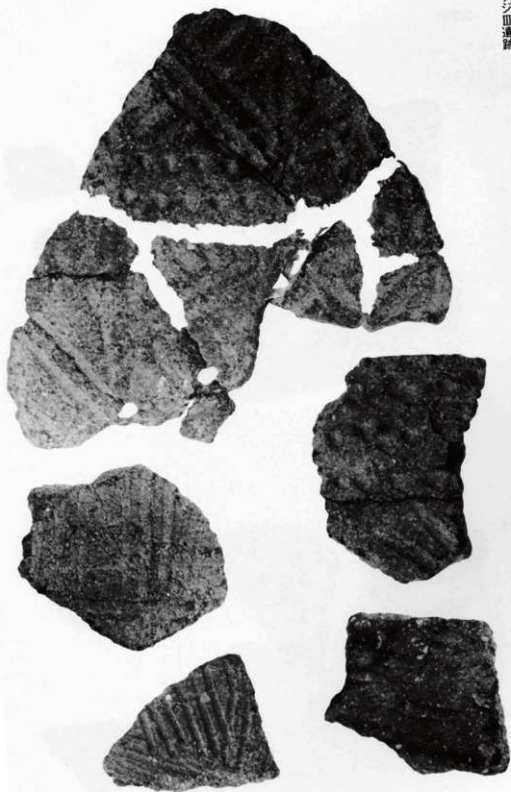


滑石製品（石鏃）出土状況



貝（オニツノガイ）  
出土状況

ケジⅢ遺跡，土器・石器等出土状況



ケジ田遺跡 土器



ケジ田遺跡 石器・滑石製品

## 鹿児島県奄美大島城遺跡出土の人骨

小片丘彦・川路則友・佐熊正史・峰 和治・山本美代子・岡元満子  
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ)



# 鹿児島県奄美大島城遺跡出土の人骨

小片丘彦・川路則友・佐熊正史・峰 和治・山本美代子・岡元満子  
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ)

## はじめに

鹿児島県大島郡笠利町万屋字城にある城遺跡から、昭和60年6月～7月の発掘調査に際し、3体の人骨(表1)と若干の散在人骨片が出土した。層位および遺物によって、古墳時代以降12、3世紀まで(古代)とされる1体を第1号人骨、中世の早い時期とされるものを第2号人骨、近世とされる1体を第3号人骨とし、散在人骨とともに計測および観察を行った。また、発掘人骨とは別に昭和59年中に笠利町歴史民俗資料館の中山清美氏により現地で採集された人骨があり、整理したところ、第1号人骨と接合可能な破片を含み、採集地点が同一で、色調や形態が類似することが判明したので、これを第1号人骨の一部と判定した。人骨の計測については、Martin & Saller (1957)に従った。

人骨調査の機会を与えて下さった笠利町教育委員会ならびに中山清美氏に深く感謝する次第である。

## 所 見

### 1. 第1号人骨(女性・壮年初期)(図版1)

上記中山氏採集人骨を含む。頭蓋骨および右上半身の骨格の大部分を欠く。保存はかなり良い。上・下肢骨は一般に細く、短く、関節は小さい。椎体縁、棘突起には骨端縁が残るほか、鎖骨の胸骨端は癒合が未了である。計測値を表2に示した。左だけ残っている鎖骨は細い。右上腕骨の肘頭窩(左は当該部位を欠く)に約 $8 \times 4$ mmの滑車孔が見られる。寛骨は破片しか残っていないが、左右とも耳状面前溝(preauricular sulcus)が見られる。以上の所見から、この個体は壮年初期くらいの女性と推定される。大腿骨体は前弯が強く、骨体上部は左右とも弱い広型に属している。また、右だけに弱いピラステル形成が認められる。脛骨も前弯が強く、ヒラメ筋線は良く発達している。脛骨体は左右とも栄養孔部、中央部いずれも中型に属し、扁平脛骨ではない。右腓骨中央部は強い扁平性を示している。いわゆる踵距面として右距骨頸上面の圧痕やこれに対向する右脛骨下端前面の外側踵距面が認められる。左脛骨全長から算出した推定身長は148.9cm(Pearson)である。骨に病変の痕跡や焼かれた形跡は認められない。

### 2. 第2号人骨(男性・熟年)(図版1)

両側の大腿骨下端から足指までの下肢骨が伸展位で出土した。そのほかの骨格は中世のころ

に攪乱されたと思われ、わずかに左肩甲骨および同上腕骨の一部や肋骨片などが残存しているに過ぎない。計測値を表2に示した。下肢骨は短い太く、関節は大きい。大腿骨の広く粗雑な膝腹筋内側頭起始部、脛骨の脛骨粗面外側に沿って著しく突出する骨稜、顕著なヒラメ筋線など、筋付着部は強く発達している。脛骨体は左右とも栄養孔部では中型型、中央部では正脛型に属し、扁平脛骨ではない。距骨のいわゆる踵距面を森本(1981)に従って観察すると、内果面の前方延長、内側踵距面、外側前方伸展、頸結節が顕著に認められる。ことに頸結節は大きく、左右とも横径15.6mmにわたって瘤状に隆起する。踵距面として、このほか頸結節に対向する脛骨の外側踵距面や、大腿骨の内側頸関節面後上端のCharlesの小面が見られる。病的所見として膝関節では、右膝蓋骨の関節面外側半に弱い磨耗があるほか、脛骨外側顆の上関節面や膝蓋骨の関節面内側半に、いずれも左右対称に粗雑な骨新生がある。また、関節面の辺縁には軽度の骨縁堤が見られる。骨縁堤は膝関節ばかりでなく、距腕関節以下の足の関節にも左右同程度に形成されているが、ただ第1中足指骨関節だけは右側における骨増殖が著しい。以上の所見を総合して、この個体を熟年の男性と判断した。右脛骨全長から算出した推定身長は156.4cm(Pearson)である。

### 3. 第3号人骨(男性・壮年初期)(図版2)

土域中から出土した人骨である。保存が良いにもかかわらず、数量は極めて少ない。頭蓋を欠き、体幹・体肢骨もわずかな破片しかないが、この中に手足の骨は比較的多く残っている。破片の断端はいずれも鋭利である。出土の際の各骨の位置は解剖学的に全く不正で、2次的に攪乱されたことを示している。出土した部分を図に示した(図1)。重複する部位はなく、骨の色調や形態上の特徴からも、これらは同一個体に属すとみて差し支えないものと思われる。計測値は大腿骨(左)頭横径47mm、腓骨(右)中央最大径17mm、同最小径11mm、同周48mm、踵骨(右)全長73mm、同高41mmといずれも大きい。従って男性骨であろう。年齢については、骨端の癒合が腸骨稜では完了後間もなく、腰椎体上・下面では部分完了の段階と見られるところから、ほぼ壮年初期と推定される。保存されている右腓骨体の外側面は深く陥凹している。病変の痕跡はなく、焼けた形跡も見られない。

### 4. 散在人骨(図版2)

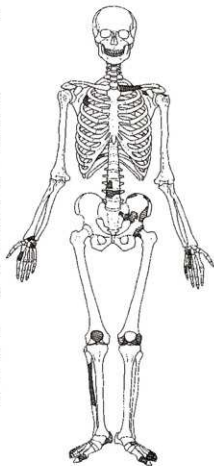


図1 第3号人骨遺存部位



表1 出土人骨

番 号	性 别	年 龄	時 代
第1号人骨	女性	壮年初期	古代
第2号人骨	男性	熟年	中世
第3号人骨	男性	壮年初期	近世

表2 体肢骨計測値 (mm)

Martin's No	第1号人骨(女・壮)		第2号人骨(男・熟)	
	右	左	右	左
<b>鎖 骨</b>				
1 最大長	—	134	—	—
4 中央垂直徑	—	10	—	—
5 中央矢状徑	—	11	—	—
6 中央周	—	32	—	—
6/1 長厚示數	—	23.9	—	—
4/5 断面示數	—	90.9	—	—
<b>上腕骨</b>				
5 中央最大徑	19	19	—	—
6 中央最小徑	14	14	—	—
7 骨体最小周	53	53	—	—
7a 中央周	55	55	—	—
6/5 骨体断面示數	73.7	73.7	—	—
<b>桡 骨</b>				
1 最大長	—	217	—	—
4 骨体橫徑	—	13	—	—
5 骨体矢状徑	—	11	—	—
5/4 骨体断面示數	—	84.6	—	—
<b>尺 骨</b>				
1 最大長	—	233	—	—
11 尺骨前後徑	—	12	—	—
12 尺骨橫徑	—	15	—	—
13 尺骨上橫徑	—	18	—	—
14 尺骨上前徑	—	23	—	—
11/12 骨体断面示數	—	80.0	—	—
13/14 扁平示數	—	78.3	—	—

Martin's No	第1号人骨(女・壮)		第2号人骨(男・熟)	
	右	左	右	左
<b>大腿骨</b>				
6 骨体中央矢状徑	26	25	—	—
7 骨体中央橫徑	26	26	—	—
8 骨体中央周	80	80	—	—
9 骨体上橫徑	28	27	—	—
10 骨体上矢状徑	23	22	—	—
23 外觀最大長	—	62	—	—
6/7 中央断面示數	100.0	96.2	—	—
10/9 上骨体断面示數	82.1	81.5	—	—
<b>胫 骨</b>				
1 全 長	—	(315)	327	—
1a 最大長	—	(322)	331	—
8 中央最大徑	29	26	29	29
8a 栄養孔位最大徑	31	29	32	33
9 中央橫徑	19	17	22	21
9a 栄養孔位橫徑	20	19	22	22
10 骨体周	76	67	80	80
10a 栄養孔位周	80	77	87	89
10b 骨体最小周	69	62	74	76
9/8 中央断面示數	65.5	65.4	75.9	72.4
9a/8a 胫示數	64.5	65.5	68.8	66.7
10b/1 長厚示數	—	(19.7)	22.6	—
<b>腓 骨</b>				
1 最大長	—	—	—	320
2 中央最大徑	15	—	16	15
3 中央最小徑	9	—	11	10
4 中央周	40	—	46	42
3/2 中央断面示數	60.0	—	68.8	66.7

散在人骨を、採集した場所別に分類した。

(1) C-2 区人骨

右上顎骨とそれにつながる右頬骨である。歯列は次の通りである。齶歯はない。

○ 7 6 5 4 3 2 ○

○：死後脱落、歯槽開放

咬耗は大部分 Martin の1度で、第1大臼歯は2度である。

(2) C-4 区人骨

上位肋骨頸片および肋骨体片である。

(3) D-1 区人骨

成人のものと思われる前頭骨片、頭頂骨片および右錐体片がある。そのほかに幼児のものと思われる肋骨片と椎骨片がある。これらがそれぞれ同一個体に属するかどうかは不明である。

(4) D-2 区人骨

後頭鱗片、下顎体左側片および遊離した左上顎犬歯がある。いずれも成人のものであるが、性別は不明である。下顎骨には第2・第3大臼歯が残存し、咬耗はいずれも Martin の2度である。遊離歯の咬耗も2度である。

(5) E-4 区人骨

下顎体左側片だけがあり、歯列は次の通りである。

■ ■ ○ ○ E

■：歯槽とともに欠損

第2乳臼歯の咬耗はわずかであり、齶蝕はない。なお、下顎体中に形成途上の永久歯が見られ、その発達程度から、この個体は3歳程度の幼児と思われる。

## 考 察

城遺跡から得られた人骨は成人3体分の埋葬人骨と、成人、幼児を含む少量の散在人骨である。埋葬人骨3体はいずれも頭蓋を欠くため、形質の全体像を知ることができないが、保存されている体肢骨から、それぞれおよそ次のような個体と推測される。

第1号人骨は体肢骨が短く関節が小さい、といった形態的特徴から女性であり、年齢は椎体、棘突起、鎖骨の骨端癒合の状態からほぼ壮年初期と推定される。脛骨全長から算出した推定身長は148.9cmで、当時としては必ずしも低くはない。ちなみに与論島風葬墓（平田、1958）の女

性脛骨からは147.1cm、現代九州人（鏑鍋，1955）の女性脛骨からは145.6cmという値が得られている。上・下肢骨は一般に細いが、各筋附着部の発達は良好で、大腿骨、脛骨では骨体の前弯が強く、四肢の筋をよく使う生活であったと思われるほか、耳状面前溝の存在から経産の可能性が考えられる個体である。また、距骨頸や脛骨下端に明らかな蹲踞面が見られ、蹲踞の習慣のあったことが推測される。

第2号人骨は膝から下の肢骨しか残っていないが、頰丈で関節は大きく、男性骨と推定される。脛骨全長から算出した推定身長は156.4cmで、与論島風葬墓（平田，1958）の男性脛骨から算出した156.5cm、奄美大島和野トフル墓（峰ら，1985）の男性脛骨からの155.2cmと同じく、かなり低い。下腿三頭筋や前脛骨筋の起始など筋附着部は強く発達しており、強い筋力の持ち主であったと推測される。膝関節には関節面の磨耗や骨新生、骨縁堤といった退行性および増殖性変化が合併して生じている。変形性関節症の所見である。変形性関節症は膝・肘・股関節のような大関節に起こりやすく、多くは加齢的变化に長期にわたる力学的負担が加わって発症するといわれるが、本個体の骨縁堤形成は左右の足の関節にまで及んでおり、これを厳しい筋肉労働の反映とみることもできよう。また、生活習慣に関連して、いわゆる蹲踞面が距骨をはじめ脛骨下端などに顕著に形成されており、生前の蹲踞の習慣を物語っている。

第3号人骨は遺存部分が非常に断片的で、形質については、恐らく屈強な壮年初期の男性、との推定しかできない。しかし形質とは別に、その出土状況は興味深い。つまり骨は覆乱され、極端に少量で、保存が良いのに破片状態のものが多く、その断端は鋭利で骨が新鮮な時期に折損したことを示し、手足のような末梢骨が比較的多く残っている、といった特異な所見である。この出土状況は、埋葬から比較的短い年月の経過後に骨の掘り上げが行われ、頭蓋をはじめその大部分は持ち去られたが、その際、骨の破損と末梢骨を中心に少量の採り残しを生じた、と想定すると最も無理なく説明できるように思われる。

散在人骨は、調査区内のさまざまな位置に点在していた人骨片で、少なくとも成人2体、幼児1体が含まれている。成人のうちC-2区人骨は歯の咬耗からみて壮年で、性別不詳、D-2区人骨は同じく咬耗から壮年と思われるがC-2区人骨より明らかに年長である。また、E-4区人骨は3歳くらいの幼児である。そのほかの破片は、これら散在人骨の一部であるのか、もしくは第1号～第3号人骨のどれかに属するものなのか不明である。ここで、第3号人骨の特異な出土状況に関して若干の考察を試みたい。この人骨はいったん埋葬された後、2次的に掘り上げられた可能性があることは上記したが、もしそうなら、掘り上げの目的は何だったのであろうか。

奄美諸島には古くから風葬・洗骨の風習があった。末永・長沢（1972）に従って概観すると、この葬法は、自然の岩陰やアダンの茂みに遺体を放置する初期の形態から、やがてトゥール墓、ジシ、モヤなどと島によって呼び分けられる風葬墓地に葬る様式に発展した。トゥール墓には自然の洞窟を利用したものと人工の洞窟とがあるが、人工洞窟は明らかに琉球文化に由来し、その開削は16世紀以降と考えられる。慣習では、遺体をトゥール墓に運び、墓の中か近くの崖

の下に置いて腐敗を待ち、しばらくして洗骨してツール墓に納めるものであったが、明治10年、公衆衛生的見地から当局の命令によって風葬が禁じられ、埋葬に改められたといわれる。ただ、実際にこの慣習が止むまでには、さらに長い歳月を要したようで、例えば与論島では明治35年ころまでジシが用いられたらしく、それ以後埋葬されるようになり、埋葬した遺体は3年後に洗骨したのちジシに安置された、という。

しかしながら、古来すべての遺体が風葬に付されていたわけではなく、埋葬もまた古くから行われていたことは、当遺跡の第1号、第2号人骨がそれぞれ古代、中世に属することからみて明らかである。文献の上では、永吉(1981)が沖永良部島郷土史資料や沖永良部島沿革誌の明治10年の項に「… 和泊、手々知名、西原は数百年前より埋葬(墓地は砂原)を行ひ来たりしも他の村々においては洞窟墓(岩岸を掘りあるいは石を築き石屋の如く木扉を造り戸口占む。又墓屋ともいう)の中に遺体を納むる風習ありしが、…」との記載があることを報じているし、名越左源太の著した南島雑話(国分・恵良校注、1984)の死葬の項には「始死者を穴蔵に入処、是をトホロと云。今笠利間切の宇宿村、又同間切手花部村にも有之。… むかしは島中なべて如此なりしを、今は大和の風にならいて土葬なり。今二、三ヶ村古法を伝へ、トホロに納るものあり。」と述べられている。名越左源太が奄美大島で配流の日を送っていたのは、嘉永3年(1850)から安政2年(1855)までの5年間であったといわれるから、幕末ころの奄美大島には風葬と埋葬とが併存していたことが知られる。ただ、ここに記載されている埋葬が洗骨・改葬のための第1次葬であったか否かは不明である。

時代が下がり、風葬禁止令によって埋葬に改められた後も洗骨の風習は残った。洗骨のための遺骨の掘り上げは現代でも行われているが、逆に時代をさかのぼって、第3号人骨の属す近世までたどることができるであろうか。そこで先に引用した文献を振り返ると、当時から風葬へのかかわり方は必ずしも一律ではなく、各島により、また島内でも各村によりまちまちで、いわば先進地区と後進地区とがあったことがうかがわれる。このような当時の事情を考えると、第3号人骨がいったん埋葬された後に掘り上げられ、その目的が洗骨・改葬であったと推測することはあながち無理ではないであろう。実際に、当遺跡の近辺には和野トフル墓(峰ら、1985)をはじめ十数基のトフル墓(ツール墓と同じ)が現存している。また、わずかな遺存骨の中に、手足の骨が比較的多く含まれていたことについては、与論島の風葬骨の例に、遺骨の中では特に頭骨を尊重し、納骨の際、その他の小骨は一括して棄てる場合もある(末永・長沢、1972)とのことから、第3号人骨掘り上げの際、末端の小骨を軽視した可能性が示唆されているように思える。なお、頭蓋を重視するという点からみると、第1号、第2号人骨は頭蓋だけを採用上げたのではないかとの疑いが生じるが、この場合、遺存骨が多く、その中には大腿骨、脛骨など大きな長骨が含まれ、骨の配置にも乱れがないことから、第3号人骨とは異なり、2次の掘り上げの可能性はほとんどないものと考えられる。第1号、第2号人骨と第3号人骨との相違は、所属年代の違いによるものか別の理由によるものか不明であり、今後の同様の事例出現に期待をかけた。

## 総 括

1. 鹿児島県大島郡笠利町城遺跡から古代人骨1体(第1号人骨)、中世人骨1体(第2号人骨)、近世人骨1体(第3号人骨)および若干の散在人骨片が出土した。年齢構成は、熟年と思われる第2号男性を除くと、壮年初期の第1号女性と、同じく壮年初期の第3号男性である。このほか散在人骨にも幼児が含まれており、死亡年齢が低かったことが知られる。

2. 第1号、第2号人骨はともに頭蓋を欠く。残っている部分から形質を推測すると、第1号女性は推定身長148.9cmで、当時としては必ずしも低身長ではなく、筋付着部の発達は良好で、四肢の筋をよく使う生活であったと思われる。第2号男性は推定156.4cmの低身長ながら、各筋付着部は強く発達しており、頑丈で強い筋力の持ち主であったと推定される。

3. 第1号女性の大腿骨体はピラステルの傾向があり、骨体上部は広型に属している。脛骨は扁平ではない。第2号男性の脛骨も扁平ではない。

4. 第1号、第2号人骨とも距骨頸や脛骨下端などにいわゆる踵跡面が認められ、生前、踵跡の習慣をもっていたと推測される。

5. 第1号人骨の寛骨に耳状面前溝が見られ、この壮年初期の女性は経産の可能性が考えられる。

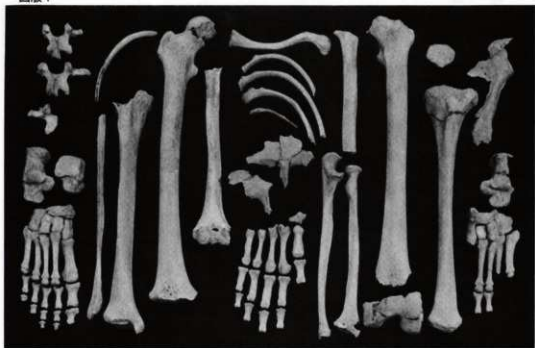
6. 第2号人骨の左右膝関節には変形性関節症の所見があり、骨緑塊の形成は距腿関節以下の足の関節にも及んでいることから、この熟年男性は、生前、膝や足の関節に負担のかかる生活を続けていたものと推測される。

7. 第3号人骨は壮年初期の男性と推定されるが、擾乱状態で出土し、遺存部分が極端に少ない、など特異な出土状況を示している。これは、埋葬後2次的に骨の掘り上げが行われた、と考えると無理なく説明できるように思われる。掘り上げの目的は奄美諸島の慣習である洗骨・改葬と推測され、当遺跡では、いったん埋葬した遺体を掘り上げ洗骨・改葬する葬法が、すでに近世にさかのぼって普及していた可能性が考えられる。

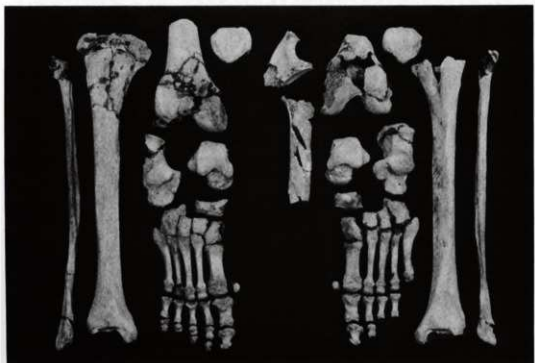
## 参考文献

- 平田和生, 1958: 鹿児島県大島郡与論島民の下肢骨の研究. 人類学研究 5(1-4): 263-315.  
崎崎勝登, 1955: 九州人下腿骨の人類学的研究. 人類学研究 2(1): 1-41.  
Martin, R. & K. Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer, Stuttgart.  
峰 和治・小片丘彦・川路則友・山本美代子, 1985: 奄美大島と野トフル墓出土の人骨. 第39回日本人類学会・日本民族学会連合大会研究発表抄録: 106.  
森本岩太郎, 1981: 日本古人骨の形態学的変異, 人類学講座 5, 日本人 I: 157-188. 雄山閣.  
永吉 毅, 1981: えらぶの古習俗. 道の島社.  
名越左源太(園分直一・恵良 宏校注), 1984: 南島雑話 2. 東洋文庫 432, 平凡社.  
末永雅雄・長沢和俊, 1972: 風葬墓地調査報告書. 観光資源保護財団.

图版 1



第 1 号人骨 (女性・壮年初期)

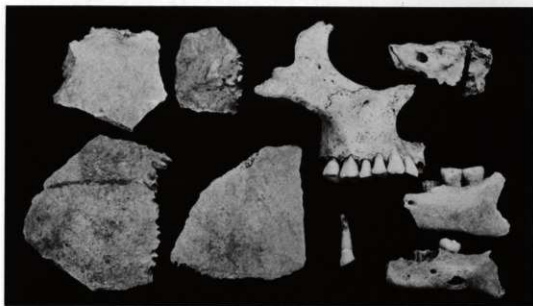


第 2 号人骨 (男性・熟年)

图版 2



第3号人骨(男性・壮年初期)



散在人骨

## あ と が き

夏、6月末といえば、鹿児島県の本土が梅雨に入ったところである。

そのころ奄美は梅雨明けを迎え、強い日ざしが容赦なく降りそそぐ。

6月24日、城遺跡の調査開始の日である。

山クワ、ジョレンなどの発掘用具がなかなか揃わず、やきもきたこともあった。

ユンボのうなりが、けたたましく響き渡って、短時間作業を中断して機械の力の偉大さ、また、それ故の開発のすさまじさを考えたこともあった。

堅い堅いⅡ層に、山クワでなく、ツルハシが欲しいな、などと語り合ったこともあった。

とにかく、暑く厳しい日々が続いた。雨で休む日は全くなかった。

調査が軌道に乗り出したころ——ケジⅢ・下山田両遺跡に破壊の危機が迫っていることを知らされた。砂取り。土地所有者が言う、周囲の工事からこれだけ残っても、土地の利用に不便である。砂取りをして道路面まで下げたい、と。

過去から現在にまでわたって生き延びて来た遺跡がどれほど大事なものか理解されていない——未来の人々に伝えることのできなかつた遺跡たち……………

今にして想いかえすと、死児の骨をみるが如き感がある。

ケジⅢ遺跡、そして下山田遺跡を調査した。記録保存——

それぞれに、いい遺物、いい遺構が出た。だから……、いや、それなのに……

作業員の方々には、暑いさなかの調査に参加していただき、また、文化課の収蔵庫および町立歴史民俗資料館では煩雑な整理作業に携わっていただき、ここに報告書が刊行されることになった。以下に、その方々の名を記して感謝の意を表したい。(繁昌・中山記)

発掘作業…窪田宏一・政 秀治・山下あや子・浜田ふじ子・泉ナミエ・川口ミカ・川畑テツ・  
元田あい子・川畑えい子・山下チマ子・与ゆり子・政ミチ子・大瀬サヨ・川畑睦子  
玉利イサエ・与フクエ・川畑君子・池田サチ・伊東和子  
整理作業…渡辺栄子・岩坪千枝子(収蔵庫) 窪田宏一・伊東和子・重信千鶴子(資料館)



グスク シモヤマダ  
城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡

発行 笠利町教育委員会 昭和61年3月  
〒894-05 大島郡笠利町中金久52-7

☎0997-63-1218

印刷 有限会社 朝日印刷  
〒890 鹿児島市上荒田町854-1

☎0992-51-2191